

露の見た夢

登場人物

- タジム  
（ソマテの盗人）
- カナ  
（娘・タジムの仲間）
- シヤツポ  
（少年・タジムの仲間）
- コンパーレ  
（アスカリナを治めるサラガヤの邦司）
- ハンガス  
（千騎長、コンパーレの腹心の部下）
- ラビナス  
（サラガヤの高僧）
- メディナ  
（コンパーレの娘）
- ラクサーダ  
（マサロ人の指導者で英雄）
- モキ  
（ラビナスの下僕）
- オルガ  
（メディナの端女）
- 僧・ムアテイ  
（ラビナスに使える僧）
- 僧・オンドル  
（ラビナスに使える僧）
- 僧・ジュテ  
（ラビナスに使える僧）
- 転びの女  
（サラガヤに忠誠を誓ったマサロ人）
- 転びの男  
（サラガヤに忠誠を誓ったマサロ人）
- チャガタイ  
（モンゴルの将）
- 兵・パド  
（ハンガスの部下）
- 兵・ガモ  
（ハンガスの部下）
- 兵・ザツパ  
（ハンガスの部下）
- その他  
マサロ人・サラガヤ兵、モンゴル兵

第一幕

夜明け前、東方の国サラガヤの領地。マサロ地方の都アスカリナの郊外にある刑場。舞台中央に一段高く、二本の杭が立っている。虐げられた民、マサロ人達が、一人、二人と集まって来る。人々は口々に彼らが救世主と信じる男ラクサーダの名を呼びながら、その姿を求めている。

マサロ人達           ラクサーダ…ラクサーダ…ラクサーダ、

下手奥より、目隠しをされ後ろでに縛られたラクサーダ、兵士達に抱えられ登場。民衆の声が一段と高くなる。ラクサーダを神輿のように掲げて練り歩く兵士達、すがろうとするマサロ人達を棍棒で叩き、押しやり、蹴散らす。

兵・パド               ええい、どけどけ、

口々にラクサーダの名を呼びながら、ラクサーダに近づき、すがろうとするマサロ人達。

兵・ガモ               どけ、

やがて中央の杭の根元にラクサーダを据える。兵士パドとガモがラクサーダを杭に繋ぐ。別の兵士達が寄ってくるマサロ人達を棍棒で叩き、押し戻す。

兵・パド

静まれ、

兵・ガモ

静まれ、静まれ、

兵・パド

マサロ人に告ぐ、本日の処刑は邦司コンパーレ様の命により行われるものである。妨ぐる者はサラガヤの治世に造反する者として何人なりとも厳罰に処すものなり。

兵・ガモ

よつて、この槍六尺の届く内に入りたる者は、命なきものと覚悟せい。

兵・パド

(高笑)よいか、サラガヤの国法はこれを犯す者に容赦ない。不屈きにも自らを世の光と称した男は、刺殺の上更に首を打たれる。

兵・ガモ

ラクサーダの骸は牛馬の糞尿にまみれ恥辱は末代に及ぶのだ。

マサロ人

(叫び)ラクサーダ、

(マサロ人達、ラクサーダの名を口々に唱える)

マサロ人

コンパーレに死を、(兵・ガモに槍の柄で打たれその場に倒れ、他の兵士たちに引き摺られて上手へ消える)

マサロ人(女)

(ラクサーダの元に駆け寄り)マサロの光を消さないでおくれ(すぐに兵士に取り押さえられ、同じように上手に消える)

兵・パド

静まれ、

兵・ガモ

静まれ、

マサロ人

ラクサーダ、

マサロ人

コンパレーに死を、

(マサロ人達、ラクサーダの名を連呼し、兵士達ともみ合う)

マサロ人

我らが光ラクサーダ、マサロの誇りラクサーダ、(声を合わせ繰り返す)

兵・パド

ええい、静まれ静まれ、

兵・ガモ

静まれ(民衆の一人を斬り殺す)貴様らも死にたいか、

瞬時に喧騒が止み、上手一段高く照明に浮かぶラビナスとハンガス。

ラビナス

わざわざマサロ人を煽り立てる事もないでしょうに。

ハンガス

コンパーレ様のご命令です、余興は賑やかにしろと。

ラビナス

慣例では、いかなる罪人も末期の言葉は残せる筈、ラクサーダにもそれは許されるのですか。

ハンガス

例の噂を気にかけておいでですか、馬鹿げた話です。コンパーレ様がそんな事を恐れていらつしやるとでもお思いですか。

ラビナス

そういう意味ではありません。ただ、マサロ人はラクサーダが復活の予言を残すと信じています。たとえ愚かな世迷言でも、災いの種となるかも知れない言葉を残させるのが得策かどうか。

ハンガス

祭司長のお言葉とも思えません。ラクサーダが何か言ったとしても、朽ち果てようとしている偶像に、どんな力があると言うのですか。もし慣例を曲げれば、それこそマサロ人は我々がラクサーダの言葉を恐れたと思うでしょう。

ラビナス

なるほど。

ハンガス

もちろん、処刑される罪人は皆、末期の言葉を残します。

ラビナス、ハンガスの照明が消え、再び民衆と兵士たちの喧騒に戻る。ラクサーダの元に駆け寄ろうとするマサロ人達、追い払おうとする兵士達。下手より、カナとシャツポ登場。

カナ 本当にタジムも首をはねられるのかい。

シャツポ

間違いない、刑場の下役に聞いたんだ。マサロのラクサーダと一緒に殺されるのは三日前に捕まった寺院荒らしの盗人だつて。

カナ

だからあたいはサラガヤの寺を狙うのは反対だつたんだよ。

小競合いを続ける群衆と兵隊達。袋を被せられ、後ろ手に縛られたタジム、兵・ザツパに引っ張られて上手より登場。

タジム

くそ、何すんだよ、放せ、放せよ。俺は何もやっちゃいねえ。ただの参拝客だよ。

兵・ザツパ

黙って歩け、

タジム

な、どこに連れて行くんだ、ここはどこなんだよ。

シャツポ

タジム、タジムだ。

カナ

タジム、(近寄れない)

兵・ザツパ

歩くんだ。(タジムを縛った縄を引っ張る)

タジム

(転ぶ)いて、痛え、何すんだよ。

ラビナス

あの男は、

ハンガス

サラガヤの寺院で捕らえました。供物を盗んだ男です。ラクサーダと一緒に処刑いたします。

ラビナス

なるほど、マサロの英雄は盗人と共に首を打たれる。ラクサーダを辱める舞台の仕上げですか。コンパーレ様らしいやり方です。

ハンガス

サラガヤはこの地で未来永劫に渡ってマサロ人を治めるのです。その為には二度とラクサーダのような男が出ないようにしなければなりません。

タジム

俺は何もやっちゃあいねえんだ、どこに連れていくんだよ。くそつ、目隠し取れよ。

シャツポ

タジム、

タジム シヤツポ、シヤツポか、おい、シヤツポ、ここはどこなんだよ。

カナ アスカリナの刑場だよ、

タジム カナ、刑場って、まさか、

兵・ザツパ さつさと歩くんだ。

カナ あんた処刑されちまうんだよ。

タジム 嘘だろ、

シヤツポ タジム見るよ、(タジムの覆いを剥ぎ取る)

兵・ザツパ 貴様ら、何をするか、(剣を抜き、振りかざす)

シヤツポ うあ、(カナと二人で慌てて下手へ)

タジム カナ、シヤツポ、助けてくれよ、(兵・ガモ牽かれ、杭の根元へ)

シヤツポ どうしようもないんだよ、

カナ

タジム、

タジム、杭に縛られラクサーダと並ぶ。やがて、押しやられた群集が遠巻きに見守る中、兵・パドと兵・ガモが杭の根元で槍の刃を研ぎ始める。照明F〇、すすり泣きしているタジムをスポット抜き。

タジム

……しょっぱいたきりろくに調べもしねえで、いきなりこれはねえだろ……くそ、けちな酒樽一つくすねただけじゃねえか。(目の前で槍が勢いよく交差する)ヒッ、おしまいだ、おしまいだ……じきにこの槍が俺のはらわたを貫いて、俺は死んじゃうんだ。(兵士達、再び槍を研ぎ始める)……死ぬっていうのは、どういう事なんだ……死ぬ、死ぬ、俺が死んじゃう。俺がいなくなる……ヒッ、嫌だ、嫌だ、死にたくねえ、俺は死にたくねえ(号泣)、うっ、うっ、

ラクサーダ

泣いているのは、誰ですか。

タジム

ウツ、ウツ、

ラクサーダ

兄弟よ、泣くのはおやめなさい。死は万人に等しく訪れるものです。最期に残された僅かな時間を、悲しみで満たしてはなりません。

タジム

死にたくねえ、死にたくねえ、

ラクサーダ

末期に嘆き悲しむと、彼岸の世でも苦しむといひます。

タジム

ウツ、ウツ、あんだだつて、槍で刺されて、首を打たれるんだ、怖くねえのか。

ラクサーダ

何を恐れる事がありましたよ。この目隠しの向こうにすら、私にははつきりと見えます。一望千里の砂の海が。砂漠の民は砂から生まれ、砂に還るのです。生きとし生ける命は、砂漠の風紋と同じ、現れては消え、消えてはまた現れる。遠い先祖の代からずっと繰り返されてきた命の営みは、絶える事はないのですから。

タジム

砂漠だ、先祖だ、冗談じゃねえ。砂をありがたく思った事なんざ一度だつてねえ。砂漠なんざ、俺の生まれ育ちと同じでくそ忌々しいだけだ。どこまで逃げてても、ついて来やがる。

ラクサーダ

人は、氏素性ではなく、心のありようで幸せになるのです。

タジム

やめてくれよ。聖者か何か知らねえが、こんな時に説教なんか聞きたくねえ。俺達盗人の頭の中は、食う事と逃げる事だけだ。盗まなきゃ食えねえ、食えなきゃ今日にも野垂死にだ。だから盗むんだ。心のあ

ラクサーダ

りようがさもしいつてか、だけどな、俺は親に仕込まれて盗人になったんだ。氏素性が俺を盗人にしたんだ。それなのに、何で殺されなきゃなんねえんだよ。(激しく泣く)あんた、マサロの神様って言われてんだろ、だったら俺を助けてみるよ。(ひとしきり泣く)

タジム

…：何だって。

ラクサーダ

あなたが助かるかどうか、やってみましょう。その代わりに、もし生き長らえたら、私の言葉を試してみてください。

タジム

…：試す？

ラクサーダ

心のありようです。私も、出来る限りの事をしてみましょう。

タジム

…：どういう事だよ。

ラクサーダ

サマラ語を知っていますか。

タジム

サマラ語。

ラクサーダ

サラガヤの経典を記した古い言葉です。

タジム

そんなの分かる訳ねえだろ。

ラクサーダ

耳にした事はあるでしょう。サラガヤの寺院で僧侶が祈祷や典礼で祈っているのを。

タジム

何度も聞いたけど、何を言っているのかはまったく分からねえよ。

ラクサーダ

助かりたければ、私の言う通りにするのです。いいですか、（ラクサーダの声、タジムを照らすスポット、F〇）まず、私の言う言葉を覚えてください。罪状が読み上げられて、最期の時がきたら……。

兵・ザツパ

（兵士が罪状を読み上げる言葉、マサロ人のすすり泣き、F I）

神が定め賜うた生まれついでの高賤を否定し、不敬なる行状を重ねたる男、マサロのラクサーダ。かの極悪人はこのアスカリナの都にて、愚かしくも邪悪な思想を流布し民の心を乱さんと画策した。よって刺殺の上首を打たれる。かたやソマテの住人タジム、神聖なるサラガヤの聖殿において供物を盗みしお前の罪は赦し難きものなり。よって、件の愚か者同様、死罪に処す。

兵・ガモ

よいか、耳あるものは聞け。マサロのラクサーダは盗人と並びて刑に

処される。この男は神でもなければ聖者でもない。

兵・パド  
サラガヤの治世を揺るがさんと計る者は、何人たりとも赦されざるを知れ。

兵・ザッパ  
ではあるが、慈悲深き邦司コンパーレ様は、罪人どもに末期の言葉を残す事を許された。刑の執行は、その後となる。(ラクサーダに)手短にな。

ラクサーダ  
(泣いているマサロ人達、やがて静かになり、ラクサーダに注目する)  
兄弟たちよ聞きなさい。私が願う事はあなた方がこれからも顔を上げ、目をしっかりと見開いて歩いて欲しいという事です。蹂躪された国を恥ずかしく思う事はありません。マサロの民は麗しき民。争いを好まず、隣人の過ちをも赦すことの出来る気高い民なのです。

老人  
ラクサーダ、わしらを残していかなでくれ。

ラクサーダ  
私はいつまでもあなた方と共にいます。この身が土に返っても、誇り高き先祖の英霊と共に、彼らが築いたこのアスカリナの都に留まるのです。安心なさい、聖者は剣ではなく徳高き言葉によってマサロの民を束縛の縄目から解き放ちます。約束しましょう。あなた方の光は太

陽です。たとえ、夕べに西の地平に没しても、朝には東の山よりいずるのです。

ざわめくマサロ人達。

マサロ人達 (口々に) 東の山、東の山より、朝には東の山より、

ラビナス 復活の予言、

ハンガス 愚かな繰言です。(立ち上がり) それでは、仕上げと参りますか。(兵士達に合図を送ろうとする)

ラクサーダ さて、祭司長ラビナス、そして千騎長ハンガス、

ハンガス 何のつもりだ、

ラクサーダ 及びサラガヤの隣人達よ、私はあなた方にも別れの言葉を残しましょう。

ハンガス 命乞いなら遅すぎるぞラクサーダ。

ラクサーダ あなた方に残す私の言葉はこうです。マサロのニガヨモギは、サラガ

ヤのキンポウゲを覆い尽くし、やがてその根も葉も枯らしてみせましよう。

ハンガス

キンポウゲ、まさか、

ラビナス

サマラ語のメデイナです、そしてニガヨモギは呪い、

ハンガス

ラクサーダめ、

ラビナス

処刑は中止です。 (ハンガスに)コンパーレ様のご指示を仰ぎましよう、

ハンガス

しかし、ここでやめる訳には、

ラビナス

万が一何かあった時に、首が飛ぶのは我々ですぞ、

タジム

キサラ、キサラ、ソイネリヤ、メデイナ、ヨンサーラ、エスケルノ。

(驚いてタジムを見るハンガスとラビナス)

ラビナス

呪いは解けた、

ハンガス 何をしておる、ラクサーダを刺せ、刺し殺せ。

ラクサーダの元に駆け寄る群衆。押し返す兵士達。

ラビナス (叫ぶ) その盗人は殺してはなりません。その盗人は、殺してはなりま

せんぞ。

(暗転)

## 第二幕

サラガヤの寺院。中央上手寄りに立つラビナス。少し離れて、下手寄りに立っているタジム。その背後にはラビナスに仕えている僧・オンドルと僧・ジユテが立っている。

ラビナス (僧・ジユテに) キエ、ナサラメレサーナ。

僧・ジユテ、机の上にあった経典を取り、タジムに差し出す。

タジム ……(事態がのみ込めない様子で、不安げに受け取る)

ラビナス (タジムに) イギョンテラ、キエ、セインタレトウワ。エセンデメラ。

タジム ……。

ラビナス

エセンデエメラ……(暫くタジムを見て)なぜ応えない。

タジム

へっ、

ラビナス

あの時お前が引用した言葉を読んでみなさいと言ったのです。その經典に書かれてあるのではないですか。

タジム

あつ、(慌てて經典を開こうとする)

ラビナス

もうよろしい、開いてもどうせ読めないでしょう。(僧・ジユテに)やはり騙りです。

タジム

(僧・ジユテ、タジムから經典を取り、机の上に返す)

タジム

俺はただ、

ラビナス

分かっています。ラクサーダですね。サマラ語は古語です。神学を修めた者か我ら僧侶でもない限り使えません。お前のような下郎にかかる素養のある筈はないのですから。

タジム

な、殺さねえでくれよ。

ラビナス

お前、名前はなんと言いますか。

タジム

タジム、

ラビナス

マサロの住人ですか。

タジム

違う、マサロなんかじゃない。俺はソマテの生まれだ。

ラビナス

大した違いはありません。サラガヤ人にあらずば人にあらずです。下賤のお前には何が起こったのかすら分からないのでしょうか。

タジム

(不安げに頷く)

ラビナス

ラクサーダはサラガヤのキンポウゲをマサロのニガヨモギが枯らすと言いました。キンポウゲはサマラ語のメディナ、つまりコンパーレ様のご令嬢の名と同じ。そしてニガヨモギは呪いの同義語。あの時ラクサーダは、邦司コンパーレ様の娘ごに呪いをかけたのです。

タジム

えっ、

ラビナス

ラクサーダは狂人ではありませんでしたが、私の知る限り、これまであのよ

うな言葉を吐いた事はありませんでした。それが、邦司の最もご寵愛深き娘ごに、呪いの言葉を残したのです。驚きました。しかし、ラクサーダ以上に我々を驚かせたのはお前です。下賤の盗人が、サマラ語で「かけられし呪いは卑しきこの身が代って受けましょう。永らえる命あるならば全てを美しき花のために」と言ったのですから。かけられた呪いを代って受けると。ましてやそれが経典の逸話から取った言葉とあつては、あの状況でお前を処刑することなど出来なかつたのです。これで分かりましたか、お前が命を永らえた理由が(タジム、何度も頷く)……たとえ数日とは言え、ですが。

タジム

へっ、

ラビナス

(僧・ジユテに)連れていきなさい。

タジム

な、助けてくれよ、殺さないでくれよ(僧・オンドルとジユテに両脇を抱えられ上手に引き摺られて行く)助けてくれよ。

(二人になったラビナス、経典を開く)

ラビナス

ラクサーダは己の命が尽きようとしている時にあのような下郎を助けた。救う価値など何処にもない、クズの命を……理に適う説明など探しても無駄かも知れません。死を目の前にして、平常心を保てる者の

ある筈もなし。

僧達の声  
本殿の方に回ったぞ、

僧達の声  
あそこだ、柱の影に隠れておる、

僧達の声  
裏庭じゃ、裏庭に逃げ込みおった。

ラビナス  
（上手に向かい）いかがいたしました。

僧・オンドル  
（上手より登場）申し訳ありません。あの下郎め、われらの手を振りほ  
どき、逃げ出してございます。

ラビナス  
何と、逃げましたか。

僧・オンドル  
ご安心ください。裏庭に逃げ込みましたので、袋の鼠でございます。  
すぐに捕らえましてハンガス様の元に連れて行きます。騙りと判りま  
した以上、ここに留め置く理由もございませんゆえ。

ラビナス  
それには及びません。あの男は私がコンパレー様の元に直接連れてい  
きます。午後には出ますので用意をしておいてください。

僧・オンドル  
かしこまりました。

僧・ジユテ  
（上手より登場）無事取り押えましてございます。

ラビナス  
そうですか。

僧・オンドル  
縛り上げて厩にでも転がしておきましょうか。

ラビナス  
そうですね……いや、僧衣に着替えさせ、控えの間に待たせておきなさい。

僧・オンドル  
僧衣に、でございますか。

ラビナス  
（頷く）

僧・オンドル  
かしこまりました。（僧・ジユテと共に、上手に退場）

僧・ムアティー  
（下手より登場）おそれながら、ラビナス様、コンパーレ様がお見えでございます。

ラビナス  
コンパーレ様が、

僧・ムアティー　ハンガス様もご一緒に。

ラビナス　何ですと、

コンパーレ　（コンパーレ、下手よりハンガスを連れて登場）変わりは無いかラビナス。

ラビナス　これは、コンパーレ様。

コンパーレ　（跪こうとするラビナスに）ああ、構わん。そのまま、そのまま。

ラビナス　コンパーレ様、せめてお知らせいただければ、お迎えに上がりましたものを。

コンパーレ　坊主の抹香臭い迎えなど何が嬉しいものか。

ラビナス　あまりに突然の事とて、このラビナス肝を冷やしてございます。

ハンガス　不意を衝かれて慌てるのは我ら世俗の者。祭司長ともあろうお方には無縁の事と思えますが。

ラビナス　（ハンガスに）坊主とて主をもてなす用意くらいはしたいものです。

コンパーレ

話は聞いたぞラビナス。ラクサーダめ、メデイナに呪いの言葉を残しておったとな。

ラビナス

はい、私めも驚きましてございます。我々に仇なす咎人とは言え、ラクサーダはこれまであのような言葉を吐いたことは一度もございませんでした。

コンパーレ

復活の予言は予想しておったがのう。

ラビナス

なにしろ己が縄打たれる時にすら、マサロ人に力づくの抵抗はするなと、説いた男でございませうから。

ハンガス

またぞろさような事を。あの男は今際の際に本性を現しただけの事でございますよ。

コンパーレ

そうかも知れんな。

ハンガス

それよりラビナス様、お気を付けにならないと、近頃私の部下の中にはラビナス様はサラガヤの経典より、ラクサーダの言葉を学ぶ事に熱心なのだと申す者もおります。

ラビナス　　ハンガス殿、コンパーレ様のご前です。お戯れが過ぎましようぞ。

にらみ合うハンガスとラビナス。

コンパーレ　　二人ともやめんか。

二人　　……。

コンパーレ　　そんな事よりラビナス、呪いを代って受けると言ったその男、どこにおる。調べは付いたのであろうな。經典の逸話を諳んじるとは、一体何者じゃ。

ラビナス　　はい、それが、ソマテの住人でございます、

コンパーレ　　何、ソマテ人。ソマテ人がサマラ語を話したと申すか。

ラビナス　　はい、何はともあれ、もし、お目通りをお許し頂けますれば、今ここに連れてまいります。

コンパーレ　　無論だ。そのためにワシは今日ここに来たのだ。早く呼べ。

ラビナス　　それでは、(僧・ムアティーに)かの者、控えの間にいます。ここへ。

僧・ムアティー かしこまりました。(上手へ退場)

ハンガス

ソマテといえはマサロに並ぶ非人の血筋。そのソマテ人がサマラ語を使ったとは、奇怪な話。ラビナス様がどのようなお調べをなさったのか、興味深いところでございますな。

ラビナス

経典を渡し、これを読むようにと命じただけでございます。

コンパーレ

なるほど。そして、その者は経典を読んだのだな。

ラビナス

その者は、

僧・ムアティー

連れてまいりました。(僧・オンドル、僧・ムアティーに連れられて、タジム登場。うなだれている)

ラビナス

ソマテ人、タジムでございます。(僧・オンドル、僧・ムアティーに目配せをし、僧達、タジムを掴んだ手を放す)

コンパーレ

苦しゅうない。面を上げい。

タジム

……(怯えきっている)

ラビナス

この者、なるほど下賤なるソマテの生まれではございますが、幼き頃より神仏に関心を持ち、サラガヤの寺院に足繁く通った由にございます。

タジム

：：（え？）

コンパーレ

それは殊勝なる心掛けじゃ。

ラビナス

参拝の折、不幸にも盗人と間違われ、大した調べも受けずに刑場に引き出されたのですが、

ハンガス

お待ちください。盗人でないと申されるならば、その根拠をお伺いしたい。

ラビナス

ハンガス殿もこの男のサマラ語はお聞きになった筈です。独学で覚えたといいその知識から見てもこの者の潔白は明らかでございます。心卑しき盗人がそのような事をするかどうかお考え下さい。

ハンガス

しかし、

ラビナス

それにこの者には、永らえてメディナ様に降りかかるあらゆる災いを

代って受ける役目がございます。

コンパーレ

その通りじゃ。

ラビナス

コンパーレ様、お許しが頂ければ、この者を私の元に置き、僧侶として学ばせたいと願いますが、いかがでございますか。

コンパーレ

それは良い考えじゃ。是非そう致せ。タジムと申したな、これからは心おきなく、神の教えを学ぶが良い。いずれ娘のメデイナにも目通りを許すが、あれはワシの命じゃ。お前が自ら受けた役目、くれぐれも忘れるでないぞ。

照明F〇して驚いているタジムの顔だけがスポット抜きで残る。

タジム

(独白)何だか、訳の分からない事になっちまったけど……とにかく俺はまだ生きてる。(笑)俺は、まだ生きてる(下卑た笑い)生きてるぞ。

第三幕

数日後のサラガヤの聖堂。中央にタジム、下手に僧・ジュテとオンドルが経典を手に立っている。

僧・オンドル

それでは、最高神サマシタールの経典はいくつの書物より成り立ちし

か、お答え下さい。

タジム いくつの書物って、神様の本は一つじゃないのか。

僧・オンドル サマシタールの経典は十二の書からなりて、各々が七つの章に分かれる。

僧・ジユテ それでは、火の神マギの訓戒ほどの書物なるやを、お答えください。

タジム じゃあその、十二のうちの一つ事だよな……さ、三番目、

僧・ジユテ 第一の書、第六章です。

僧・オンドル 昨日学んだばかりではありませんか。

タジム ……。

僧・ジユテ タジム殿は、お疲れのご様子。本日はこれまでといたしましょう。

僧・オンドル そのようにいたしましたしょう。

僧・ジユテ それにしても、我々凡僧にはラビナス様のご真意は時に図りかねます。



ろ。俺にはちつとも分からねえんだが、ちゃんと読めたら面白れえの  
かな。

モキ 私には、まだ経典を学ぶ事は許されておりませんから。

タジム どういうことだよ。あんたも坊さんなんだろう。

モキ 末席を汚しているだけの身です。

タジム 分かり易く話してくれよ。

モキ ここでは普通、経典を学ぶ時間が与えられるのは古参の僧だけです。

そうなる前に三年以上の下働きをしなければなりません。

タジム 三年、

モキ それに、タジム様がお持ちのその経典は、一般信徒の持つそれと違っ

て高貴な方だけがお持ちになるもの。私など触れる事すら許されては  
おりません。

タジム ……そっか。じゃあ、あんたここに来てまだ三年経ってないんだ。

モキ 五年目が過ぎました。

タジム 分からねえな。

モキ 私の生家は良民ではなく、下人に等しき農奴です。

タジム 農奴って、あんた、サラガヤの生まれだろ。

モキ もちろんそうです。しかし、サラガヤ人にも身分の違いはありません。

タジム へえー、そうか。驚いたな。このアスカリナで見るサラガヤの人間はみんな兵隊か坊さんだ。俺達はどっちに出会っても頭を地べたに擦りつける。それなのに、サラガヤ人にも下人や農奴がいるとはな。

モキ ……(睨みつける)

タジム 悪く取らないでくれよ。なんか親しみを感じるって事だよ。仲間に出会ったみたいでさ。だって、俺なんか、

モキ タジム様、これが数日前なら今のあなたの言葉は私にとって屈辱です。しかし、今私はあなたのお世話をするようにとラビナス様に命じられています。ですから、あなたの方が私より神に近い人だと信じます。

何よりそれはラビナス様がお決めになった事ですから。しかしソマテ人のあなたが経典を学ぶ事に、我慢のならない人たちもいます。その事はお忘れにならない方がよろしいでしょう。

タジム

…分かったよ。

モキ

申し訳ございません。

タジム

あんた、正直だな。な、もし知ってたら教えてくれないか。あのラビナス様はなぜ俺を助けたんだ。ただの酔狂で俺を坊主にしようって訳じゃないだろ。

モキ

私には、分かりません。

タジム

そっか、そうだよな。

モキ

申し訳ございません。

タジム

いや、いいんだ。

モキ

失礼いたします。(上手に向かおうとする)

タジム

待つてくれ(モキ、立ち止まる)……あのな、あんたが触る事も許されていらないような大事な物を、下郎の俺が、粗末にして、さぞかし腹が立っただろうな。すまなかつた。俺なんかがさ、神様の事を勉強したつて、豚に真珠だよ。でも、心配しねえでくれ。どうせ俺はここに長居しようとは思っちゃいねえんだ。頃合いを見て出て行くつもりだ。だからそれまでの辛抱だと思つて付き合つてくれよ。ほら、あんた、いい人みたいだからさ。

モキ

タジム様、ここを出ると仰られても、それは叶わぬ事です。

タジム

叶わぬつて、どうしてだい。

モキ

ラビナス様が、いえ、誰よりコンパーレ様がお許しにならないでしょう。もし逃げて、すぐに追つ手をかけられません。

タジム

そんな事は百も承知だ。あんたも知つてるだろ、俺はもともと盗人だよ。生まれた時から追いかけられつぱなしだ。逃げる事には慣れてるさ。確かにこの間はドジを踏んじまったが、あれは油断しちまったんだ。そう、生まれて初めて捕まった。けどもう二度と捕まりやしねえ。

モキ

タジム様、一介の盗人が小働きをして逃げるのではありません。邦司

に追われる時は追っ手の数は数百人。賞金を掛けられ国中にふれが回ります。逃げられる筈はないのです。

タジム

：俺が賞金首になるっていうのか。

モキ

そうです。捕まってもラクサーダの予言の事がありますから殺される事は無いでしょうが、鎖につながれて一生を牢の中で送る事になります。ラビナス様のお計らいが無かったら、もともとそうなっていた事の事ですから。

タジム

：だから、おとなしくしているって事か。

モキ

聞きかじった話から、私なりに推測した事を申し上げました。お気を悪くなさらないでください。

タジム

：多分、あんたの言う通りだよ。ありがとう。

モキ

：(出て行くこうとする)

タジム

名前、聞いてなかったよな。

モキ

モキと、言います。

タジム                    どうやら、長い付き合いになりそうだ。よろしく頼むよ。

タジム、上手に退場するモキを目線で見送った後、テーブルに歩み寄る。下手より僧衣を着てフードを目深に被ったカナとシャツポ登場。タジム、二人をチラリと見るが正体には気づかない。テーブルの果物を手に取り食べようとする。

カナ                        經典の勉強が終わってないだろ。それが終わるまで、飯はお預けだ。

シャツポ                そうだ、お預けだ。

タジム                    (声で気づき)カナ、シャツポ、

シャツポ                タジムのドジ野郎、

タジム                    (指を口に、上手の様子を伺い、喜)くっそー、二人とも何しに来たんだよ。

カナ                        あんたの泣きっ面を拝みに来たのさ。

シャツポ                そうだよ、も一度見たくてさ(刑場でのタジムの真似をして)助けてくれ、死にたくねえ。

タジム シヤツポ、この野郎(シヤツポに飛び掛る)

シヤツポ 助けてくれ、死にたくない、

カナ 死にたくない、

タジム 馬鹿にしやがって、

三人 (大笑い)

タジム カナ、(僧衣を)お前がこさえたのか。

カナ あたい以外に誰が作れるのさ。

タジム 本物と見分けがつかねえ。

シヤツポ 材料をくすねて来たのはオイラだぜ。

カナ (フードを被り)こうやってたら、誰も気づかなかつた。

タジム まったく器用なもんだ。

シャツポ

カナは、裁縫の上手い嫁さんを貰ったらタジムだって幸せになれるって。

カナ

(殴る真似) シャツポ、

シャツポ

助けてくれ、死にたくねえ、

タジム

(笑) もうやめろって、

カナ

それにしても、タジムは悪運が強いよ。

タジム

そう簡単に死んでたまるかってな。

カナ

でも、坊さんになる修行をしているって聞いた時は絶対嘘だと思った。

タジム

俺だって信じられねえさ。

シャツポ

今度こそタジムは助からないって思ったのに。

タジム

まるで助からなけりや良かったみてえだな。

カナ  
マサロの連中は、何で預言者様が死んで、あんな盗人が助かるんだって言ってるよ。

シャツポ  
あいつらは、本気でラクサーダが生き返るって信じてるんだ。

タジム  
……。

カナ  
人間死んじゃったらおしまいさ。

タジム  
お前ら、腹へってないか。

シャツポ  
いつだってぺこぺこさ。

タジム  
(テーブルの上の食物を)全部食っていいぞ。

シャツポ  
スゲー、(両手に挿んで嚙り付く)ウマー、

タジム  
カナ、お前も食えよ。

カナ  
うん。ねえタジム、いつここを出るんだい。

タジム  
さっきの話、聞いてたんだろ。ここを出るのはそう簡単じゃなさそう

だ。

カナ　じゃあ、ずっとここにいて本当に坊さんになるのかい。

シャツポ　こんな美味しいものを毎日食えるんだったら、坊さんも悪くないよ。

タジム　（シャツポに）そうだな、修行して偉い坊主になって、毎日美味しいものを食うってのも悪くないな。

カナ　本気かい、タジム。

タジム　そんな訳ねえだろ。おれが坊主になれるかよ。

カナ　安心した。

タジム　ただな、ここを出たらもうアスカリナだけじゃなくてサラガヤの領地には住めなくなる。だから、逃げるとしたらホラズム辺りまでは行かないとな。

カナ　ホラズム、西の蛮人が住んでるってあの国かい。

タジム　ああ。お前ら、ついてくるか。

カナ  
当たり前だろ。

シャツポ  
行ってやるよ。

タジム  
よし。だったら作戦だ。まず、行きがけの駄賃にこの寺で一働きする。ここには高そうな細工物がごろごろしてるからな。目ぼしい物をがっぱり頂いてずらかるんだ。

カナ  
タジム、

タジム  
分かってるよ。サラガヤの寺をやるのは気が進まないってんだろ。

カナ  
そうだよ。この前もあたいは反対したけど、やっぱり失敗したじゃないか。

シャツポ  
そう言えば、そうだよな。

タジム  
あの時は、確かに甘く見た。だからドジった。だけど頭使ってちゃんと準備すれば絶対に失敗なんかしねえ。現にお前達は昼間っからここに忍び込んで来てるじゃないか。

カナ  
それは、この衣装のおかげさ。

タジム  
だろ、頭を使って出来たんだ。

シャツポ  
それもそうだ。

タジム  
それに、ホラズムは遠い、逃げるには先立つものが必要だ。

カナ  
だけど、

タジム  
サラガヤの領地を出るには十日はかかる。すぐに気づかれて追っ手をかけられたら逃げられない。だから紀元節を待つんだ。

シャツポ  
紀元節？

カナ  
サラガヤの祭りね。

タジム  
ラビナスってここの親分と側近たちは本国でやる札拜に出かけて、四五日前からいなくなるらしい。今からだと二つ目の新月だ。

シャツポ  
随分先だな。

タジム

準備するにはちようどいいさ。お前らは旅の支度をしてくれ。盗んだ品物を運ぶには駱駝も必要だ。俺はこの寺のどこに何があるかじっくり調べておくよ。

カナ

時々、忍び込んで来てもいいかい。

タジム

危ないって言ってるのはお前だろ。

カナ

だけど、

シャツポ

(まだ食べながら)タジム、乙女心を分かってやりなよ。

カナ

シャツポ、

タジム

分かった。段取りの進み具合の確認を、今度の新月の日、今頃の時間に。坊主たちが飯を食い始めて中が手薄になったら本堂の裏手で俺が手を叩く。

カナ

壁越しで、聞こえるかな。

シャツポ

(首にかけていた笛を出し)これを使うといいよ。

タジム  
(受け取る)笛か。

シャツポ  
虫の音とそっくりで怪しまれない。音は小さいけど結構遠くまで響くんだ。

タジム  
分かった(首にかける)

僧・ジュテ(声)  
しかしながら、タジム殿には何かを学ぶという気概も意欲もまるで見受けられません。

僧・オンドル(声)  
さよう。私どもがいくら噛み砕いて教えましても、

タジムが目配せをして、カナとシャツポ下手に退場。

ラビナス  
進歩がないという事ですな。(僧・ジュテ、オンドルを従えて上手より登場)つまり、あなた方は、私の期待に応えられないという事ですか。

僧・ジュテ  
いえその、やはり口伝では、難し過ぎるのやも知れませんが。

僧・オンドル  
さよう、明日からは、文字をお教え致しますよう。

ラビナス  
もうよろしい。下がっていなさい。

僧・ジユテ  
申し訳ございません。

僧・オンドル  
失礼致します。(僧達、下手に退場)

ラビナス  
(タジムをチラリと見た後、正面を向き、静かに) つくづく嫌気がさしました。

タジム  
へっ、

ラビナス  
何か一つくらい取り得があつて良さそうなものですが、何も無い。

タジム  
…あの、

ラビナス  
我慢にも、限界というものがあります。

タジム  
これからは、ちゃんと勉強して、その、

ラビナス  
(笑)お前の事ではありません。マサロの地、そしてこのアスカリナの街の事を言っているのです。

タジム  
あ、そっか。

ラビナス

私はここに来てもう六年になりますが、この地方にはうんざりです。住んでいる者たちは皆愚かで頑固。街は乾燥しきってそこから中埃だらけ。部屋の中にまで砂が入ってくる。ここは人の住む所ではありません。

タジム

その通りですね。まったく住んでいる奴らの気が知れない。

ラビナス

この地は雨だけでなく、あらゆる天の恵みに見離されています。

タジム

仰る通りです。

ラビナス

昔、ここに人が住むようになった唯一の理由があります。それは何だと思えますか。

タジム

え、何でしょう。

ラビナス

井戸です。

タジム

あ、そうか。

ラビナス

恵まれた水量ではありませんが、周りを囲む荒涼とした砂地には無い

貴重な水です。しかしこの地方には雨は殆ど降らない。タジム、お前は地下の水がどこから来るのか知っていますか。

タジム  
：：どこでしょう。

ラビナス  
遙か離れたサラガヤ本国です。サラガヤには美しい緑の大地があります。神々に祝福された数々の山があります。そこに降った雨が地下の水脈となって、わずかばかりの水をこの地に運んでいるのです。

タジム  
へえ、面白れえ話だ。じゃあ俺達が飲んでいるのはサラガヤの水なんですね。

ラビナス  
その通りです。そして、そこにも真理が隠されている。雨は決してマサロやソマテの地に降るのではなく、サラガヤに降るのです。神の祝福はサラガヤに降り注ぎ、サラガヤを通してマサロやソマテにもその幾分かをもたらされる。それは理屈ではなく、神がそうお決めになった事なのです。更に、それはそのまま、国として種族としてのサラガヤとマサロのあるべき姿なのです。誰にも変えることは出来ません。

タジム  
なるほど。

ラビナス  
あのラクサーダは、人には生まれついでにの貴賤など無いと説きました。

サラガヤ人もマサロ人も同じだと。暴言です。それではまるで「全ての生き物は鳥である」と言うのと同じではありませんか。

タジム  
鳥？

ラビナス  
豚に向かって「お前にも空を飛ぶことを許そう、お前は今日から鳥なのだ」と言っても、何の意味がありますか。豚に空が飛べますか。

タジム  
豚は飛ばねえ。

ラビナス  
その通り。神が定め賜うた分をわかまえる事が大切です。

タジム  
なるほど、ラビナス様の話は分かり易い。

ラビナス  
タジム、

タジム  
は、はい。

ラビナス  
お前は、分をわかまえていますか。

タジム  
当たり前ですよ。ラビナス様の言う事は、俺にとっては神様の言葉だ。

ラビナス

無理をしなくても良い。

タジム

無理なんかしてねえ。俺は本当にラビナス様の手足になって、何でもします。

ラビナス

私は、お前にそれほど多くを期待している訳ではありません。

タジム

はい。

ラビナス

ただ、お前に出来る事で協力して欲しいのです。そうすれば私はお前に、ここでの安泰な暮らしを約束しましょう。

タジム

有難てえ話だ。

ラビナス

良いのか。お前はあの刑場で確かに神からの啓示を受け、サマラ語の經典の言葉が心に湧いて出たのです。あの時の事は、誰に聞かれてもそのように答えるのです。

タジム

はい。

ラビナス

もしサマラ語を話してみると言う者がいたら、神の啓示がなければそれは出来ないと言えなさい。

タジム

はい。今は、そうします。でも俺はラビナス様のご恩に報いるように一生懸命に勉強して、いつか本当に立派な坊さんになってサマヲ語だつて、

ラビナス

タジム、分をわきまえろと言っているではありませんか。お前はとも僧侶になれるような器ではありません。

タジム

へっ？

ラビナス

僧侶になるには、高貴なものに対する畏敬の念と、真理を渴望するひた向きが必要です。しかしお前は粗野で品がなく、不正直で、何より心根が芯から卑しい。そうやって神妙な顔で私の話を聞きながらも、腹の内では赤い舌をぺろりと出してほくそえんでいる。

タジム

そんな事は、

ラビナス

それでいいのです。

タジム

え、

ラビナス

お前のような者が真理を求めて何になりますか。本物の僧侶ではなく、

むしろそれらしく見える偽りの僧侶になりなさい。私は、あの刑場でお前が見せた芝居と、その卑しい生まれ育ちを見込んで助けたのです。

タジム

ラビナス様、

ラビナス

ラクサーダから教えられたばかりのサマラ語を、お前はあの時あたかも神の啓示を受け、心の内から搾り出すかのように口にしました。不正直で厚かましいお前の生きることへの執着です。しかしそれは見事でした。あの瞬間はこの私ですら不覚にも騙されてしまったのですから。

タジム

：：偽りの僧侶ってのは、どういうことですか。

ラビナス

中途半端な知識をひけらかすとほころびが出ます。お前自身は何の知識も持っていないが、神がお前を通して語られるという事にするのです。都合の悪い時は神からの啓示が無いと言えば良い。お前が語るべき言葉は事前に私が用意しましょう。お前はそれを自分の言葉のように話せばよいのです。

タジム

俺に一体何をしろってんですか。

ラビナス

詳しい事はいずれ話しましょう。ただ、偶然ではあってもお前は二つ

の良い条件を兼ね備えています。一つは、お前の命は邦司によって守られているという事。なにしろコンパーレ様はその娘ごメディナ様を溺愛しておられる。もう一つは、お前がソマテの生まれであるという事です。ソマテはマサロに隣接する狭い地域に過ぎませんが、アスカリナの東に位置し、小高い山もあるのです：分かりますか。

タジム

：東の、山より、

ラビナス

思った通り、飲み込みは早いようですね。さしあたりその下品な言葉使っただけは早く直しなさい。蘇った聖者にはふさわしくありません。

(暗転)

第四幕

夜、マサロ人を集めた礼拝堂での集会。上手の上段、椅子に座るラビナス。周りには僧達。床に座っているマサロ人ざっと十人。それを。下手から見ているモキとタジム。「転び」と呼ばれるマサロの男女二人が、サラガヤとその神を称えている。

転び・男

マサロの兄弟達、聞いてくれ。俺は自分自身の体験を話しているんだ。そりゃ俺だって初めは迷ったさ。でも、どうしても不思議だったんだ、みんなが言うようにマサロが本当に正しいのなら、なぜ神様はサ

転び・女

ラガヤの味方をなさるんだって。それで、ちょっとだけサラガヤの神様の言葉に耳を傾けてみようかなって思った。おかげで今は身も心も何一つ不満の無い毎日だ。サラガヤの偉大な王様と、最高神サマシタル様が俺を助けてくださったんだ。

あたしも同じさ。ラビナス様の言葉を聞いて初めて目が覚めたんだよ。あたし達マサロは、差し出されたサラガヤの手にただすがるだけではないんだって事に。

転び・男

どうやって生きてくかなんて、サラガヤの王様と神様に教えてもらえばいいのさ。

転び・女

そう、マサロを救ってくださる神様はサラガヤに住んでいらっしやるんだ。

転び・男

なっ、(近くのマサロ人の顔を覗き込み)ありがたい話じゃないか。

転び・女

本当に、もったいないくらいありがたい話だよ。あたしはそう思うけどね。

僧・ジユテ

二人とも、それくらいで良いでしょう。お座りなさい。気持ちは分かれますが、言葉に力が入り過ぎて、無理強いと思われても困りますか

ら。

僧・オンドル  
しかし気持ちは本当に良く分かります。こんな場合は仲間の事を思えば、つい言葉に力も入るでしょう。

僧・ムアティー  
誰もが「あの木の実はひどい味でおまけに毒がある」と言っていたのです。ところが、食べてみたらこれが驚くほど美味な上に、体中に力がみなぎる。

僧・オンドル  
声を張り上げて叫びたくなるのも当然です。

僧・ムアティー  
そうです、当然です。

僧・ジュテ  
いかがでしたか、お前達と同じ、マサロ人の二人が、偽りの無い気持ちを話してくれたのです。感じる場所があったのではないですか。

僧・ムアティー  
(マサロ人の一人に)何か感じるところがあったでしょう。

マサロ人  
そんな気も、するけど……。

僧・オンドル  
理屈はいらないのです。正しい神への信仰と、偉大なるサラガヤ国王への忠誠を誓いさえすればお前達も救われるのですから。

僧・ムアティー

そうです。何も難しい事はないのです。(照明F〇、集会の場シルエツトになる)素直な心で祈れば良いのです。(照明、下手のタジムとモキにF I)

僧・ジユテ

(遠くに聞こえる)素直な心で、サラガヤの統治を受け入れれば良いのです……。

タジム

あの二人は、本当にマサロなのか。

モキ

そうです。「転び」ですが。

タジム

転び？

モキ

サラガヤへの忠誠を公言しているマサロ人達の事です。元々は、同じマサロ人同志が、サラガヤについた者を蔑んで使った呼び名ですが、今は私達もそう呼んでいます。

タジム

自分らで転ばせといて、転んだ奴を馬鹿にしているって事か。

モキ

タジム様、

タジム

話を聞いてる連中も、サラガヤの神様を信じているのかな。

モキ

転びの二人を含め、サマシタールの教えを分かっている者など一人もいません。ただ、楽になりたいのですよ。彼らは疲れているのです。

タジム

疲れているって、サラガヤに齒向うことにかい。

モキ

種族の意地にこだわる事にです。それがなければ、今よりは楽になれるのですから。彼らの心は揺れています。こんな夜中に集会を開いているのは、彼らがここに来ている事を他のマサロ人達には知られたくないからです。

タジム

なるほど。それにしても話方が一方的だ。

モキ

批判はお控えください。

タジム

批判じゃないさ。ただ、あんな話し方じゃ誰も気持ちを開かないって事だよ。

モキ

……。

僧・ジユテ

(タジム達の所に来て)タジム殿、ラビナス様があなたの顔見せをなさ

るそうです。

タジム  
顔見せ、俺も、何か話すのか。

僧・ジユテ  
まさか。あなたはただ神妙な顔をしていれば良いのです。お話はラビナス様がなさいます。

タジムと僧・ジユテ、上手に移動。モキは舞台奥の下手に。

僧・ムアティー  
それでは、最後にラビナス様よりのお言葉を頂きましょう。

ラビナス  
(壇上、椅子から立ち上がり)よろしいですか、生まれで言えばお前達は牛馬にも劣るのです。他人の家畜を殺せば罪になるが、主のいない非人を殺しても罪にはならない。お前達の命はサラガヤに仕えて初めて家畜のそれと同じ価値を持つのです。知恵と哀れみはいつの時も高きより低きに流れる。闇の中でもがき続ける必要があるでしょうか。意地を張らなければ、サラガヤの寛大な英知によってお前達も光の中を歩く事が出来るのですから。

転び・女  
ありがとうございます。(ラビナスの足元に跪く)

転び・男  
ありがとうございます。ラビナス様。(ラビナスの足元に跪く)

ラビナス

(転び達の頭を撫で)さてここに、お前達と同じ非人の出でありながら、素直な気持ちでサラガヤの神に手を合わせ、奇跡を起こした者が一人います。タジム、これへ。(タジム、ラビナスのそばに立つ)この中にも、過日執行されたラクサーダの処刑を見た者がいるでしょう。この男タジムは、あの時ラクサーダの隣で杭につながれていた者です。(マサロ人達、どよめく驚いた事に神はこの者を、お前達非人の中から選ばれました。この者は今、僧侶としてサマシタルと十二神の教えを学んでいるのです。よろしいか、素直に心を開くものには神は哀れみを垂れてくださる。今夜、家に帰ったら寝る前にこの事を良く考えるように。私からの言葉はこれだけです。(タジムに)戻ってよろしい。

タジム

あの、一言だけ言ってもいいですか。

ラビナス

タジム、

タジム

ですから、感謝の気持ちだけ、言わせて貰いたくて。

ラビナス

：一言だけにしておきなさい。

タジム

ありがとうございます。(マサロ人達に)え、名前は、タジムです。俺は、あ、私は恵まれてまして、毎日、経典から、そしてラビナス様か

ラビナス

ら神様の言葉を学んでいます。新しい事を教わると、いつもびつくりします。(マサロ人、笑う)どうしてかって言うと、神様の考えはすごく深いからです。え、あの、

タジム、

タジム

あつ、すぐに終わります。そうだ、みんなはアスカリナの井戸の水がどこから来るのか知ってるか、いや、知ってますか。実は、聞いて驚いちゃだめだよ。(マサロ・笑)その水は遠く離れたサラガヤ本国から来ているのです。びつくりしただろう。(マサロ・笑)神様は恵みの雨をサラガヤに降らせるのです。そして地面のずっと下の方に川を作つて、その川でここマサロのアスカリナにも水を運んでくださる。もちろんソマテにも。だから、みんなが毎日飲んでいる水はサラガヤの水なのです。雨はマサロやソマテの地に降るのではなく、サラガヤに降るのです。そしてここにも真理が隠されている。確かに神様はサラガヤに雨を降らせる。しかし、決してマサロやソマテを忘れてはいないから、遥か離れたこの地にも地面の下に川まで作つて水を運んでくださっているんだ。サラガヤの神様はマサロやソマテも忘れていないつて事だよ。ありがたい話さね。

マサロの女

(立ち上がり)つまり、神様はあたし達の事も大事に思ってくださいってなんだね。

タジム

そういう事だ。特におばちゃんみたいなポツチャリした美人ならなお更だ。

タジムの屈託の無い話し方に、笑うマサロ人達。

ラビナス

タジム、

タジム

あ、いけねえ。(ラビナスに)一言がつい長くなって、申し訳ありません。実は、この井戸の話はこないだラビナス様に教えて貰った奴なんだ。いい話だろ、みんなにも聞かせたくなつてさ。(マサロ人達に)さて、お開きの時間だ。外は暗いから、みんな足元に気をつけて帰ってくれよ。

マサロ人男

(タジムの元に来て)何だか、今の話は良く分かったよ。

タジム

そいつは良かった。

マサロ人女

サラガヤの神様が、私達マサロの事も気にかけていらつしやるなんて、本当だったら嬉しい話だ。帰ったら、ゆっくり考えてみるよ。

タジム

そうかい。来てくれて、ありがとう。

マサロ人 (ラビナスの手を取り)ラビナス様、ありがとうございます。

マサロ人達 (口々に)ありがとうございます。

明るいい顔で帰って行くマサロ人達。驚いている僧達。じつとタジムを見ているラビナス。照明変わり、アスカリナの往来。舞台前の方にマサロの男と女登場。

マサロ人男 聞いたかい、サラガヤの寺でソマテ人が僧侶になったんだ。しかもそ

いつはラクサーダが処刑された時に一緒に杭に繋がれていた男だそう  
だ。

マサロ人女一 何馬鹿な事言ってるんだい。そんな事があるもんか。ソマテはサラガヤ

から見たら私らと同じ非人だよ。

マサロの男 それが祭司長のラビナスが、神様はマサロやソマテも大事に思っ

ださってるって言ったらしいんだ。

マサロの女一 あんたそんな話誰に聞いたのさ。

マサロの男 石工のケバだ。

マサロ女一　んな事だろうと思つたよ。まったく馬鹿だよあんた。

マサロの男　何でだよ。

マサロの女一　あんな転びの話を真に受けて。

マサロの男　そうかな。

マサロの女一　そうだよ、ソマテ人がサラガヤの坊主になるなんて、

マサロの女二　あくその話ならあたいたいも聞いたよ。とにかくその男の話が分かり易くて面白いつて。

マサロの男　だろ、俺もそう聞いてき、石工のケパにも誘われたし、一度くらい話を聞ききに、

マサロの女一　あたしやごめんだね。誰が何てつたつてサラガヤの寺なんかには、

マサロの女二　もしかして、サラガヤの坊主になったソマテの男の話かい。

マサロの男　あんたも聞いたのかい？

マサロ女三 聞いたわよ、偉そうにしてないし、話が面白いって。

マサロの女一 何言ってるの。

マサロの女三 それにめっぼういい男だって。

マサロの男 見てくれはどうでもいいけどな、

マサロの女一 ううん、それ大事、大事よ。

マサロの男 え、

マサロの女一 そうね、一度くらい話聞いてもいいかも知れないわね。

男と女二 え、

マサロの女一 今度の集会いつかしら、ケパに聞いてみようかな。(上手に退場)

### 第五幕

上手より登場のタジム、上手袖奥を窺う様子。下手より僧・ジユテ登場。

僧・ジユテ タジム殿、いかがなさいました。

タジム あ、いや、その…あ、実は、第四の書、第三章、第二十、七節について考えていたのでございます。

僧・ジユテ 風の神シダールの戒めでございますね。

タジム そう、そのシダール様の教えを、深く、深く、考えていたのです。

僧・ジユテ そうですね。お気持ちは察します。煩惱とは、なかなか断ちがたいものです。

タジム は？

僧・ジユテ 第四の書、第三章、第二十七節、風の神シダールが傾城について話すくだり。「女ごの色香に迷う者は、国を滅ぼす」という教えですね。

タジム あっ、そ、そうです。

僧・ジユテ (じつとタジムを見る) 深く、深く…。

タジム あの、この事はどうかラピナス様には、内緒に、

僧・ジユテ

分かっています。(意味深な笑い)

タジム

あ、(上手を指し)どうぞ。私は、もうしばらくここにいて、一人瞑想などして心を落ち着かせたいと思います。

僧・ジユテ

それがよろしいでしょう。もし本堂に近づく者がおりましたら私がタジム殿を一人にしておくようにと申しつけましょう。(上手に退場)

タジム

ありがとうございます。(僧・ジユテを見送り、下手へ。周りを窺った後、僧衣の下から笛を出し、下手袖に向かって吹く。虫の音のような音がする)

シャツポ

(暫くして、下手より)ソマテの義賊、シャツポ参上。(ポーズ)

カナ

(下手より登場、シャツポを軽く叩く)何やってんの。タジム、遅いから待ちくたびれちゃったよ。

タジム

すまねえ。早速だが、準備の方はどうなってる。

カナ

万全さ。

シャツポ

駱駝は五頭、干し肉は羊で八貫、乾酪だって三壺、やぎの乳で作った

奴だ。

カナ 小麦粉もいっぱい用意したから旨いチャパティーが作れるよ。

タジム 食い物の話ばかりだな。天幕は、

シャツポ 二張、

カナ 契丹人のキャラバンから頂戴した。

シャツポ そうだ、その話を聞かせてやんなきゃ。面白かったぜ。

カナ そうだよ。タジムにも見せてやりたかったね。

タジム 何だよ。

カナ 天幕を盗んだ時の話さ。

シャツポ おいら達は人が入っている天幕を頂いてきたんだぜ。

タジム 嘘だろ。

シャツポ

本当さ。夜中、契丹人が寝ている天幕にこっそり近づいて幕を地面に留めている杭を全部はずしたんだ。

カナ

そう、それから天幕の端を紐で結わえて、その紐を駱駝の鞍に縛りつけた。

シャツポ

そして、おいら達は駱駝の背に跨って思いっきり鞭をくれてやったのさ。勿論駱駝はものすごい勢いで天幕を引つ剥がして走り出した。

タジム

そいつは凄え。

カナ

一瞬の出来事だよ。いきなり天井が無くなったもんだから、契丹人の奴ら初めは何が起こったのかも分からないで目を白黒させてんのさ。

タジム

やるなあ。

シャツポ

それでも、すぐに気がついて怒って大声で叫びながら、裸で追っかけて来やがったんだ。

カナ

どんなに頑張ったって駱駝に追いつける訳はないのにね。

タジム

そりやそうだ。

シャツポ

少し走って振り返って見たら、豆粒みたいに小さくなった契丹人が、裸でぴよんぴよん跳ねてんだ。

タジム

本当か。

シャツポ

おかしくて、おかしくて、涙流して笑っちゃったよ。

カナ

タジムも一緒だったら良かったよ。

シャツポ

うん、大笑いさ。

タジム

くそ、俺もこんな所は早く出て、またお前らと暴れまわりてえよ。

シャツポ

そうだよ、次の新月なんて言っていないで、早く出ようよ。

タジム

出来る事なら、本当にそうしたいくらいだよ。

カナ

何言ってるのさ。すっかりここが気に入って、偉そうにマサロ人を相手に説教なんかし始めたって聞いてるよ。本当に坊さんになるつもりじゃないのかい。

タジム 話を合わせているだけさ。坊主の修行を喜んでやっつてるふりをしてな。

シャツポ それも笑えるな、タジムの説教を有難く聞く奴がいるなんて。

タジム なかなか上手いもんだぜ。

カナ そもそも、何でタジムは殺されずに済んだんだい。

シャツポ それに、どうして坊さんなんだよ。

タジム 俺も初めは良く分からなかったが、どうやらラビナスって坊主の親玉は、俺を二代目のラクサーダにしようと思っっているみたいなんだ。

カナ タジムをマサロの聖者に、

タジム ああ、ただし自分の思い通りになる聖者さ。

カナ ふん。

シャツポ 何でそんな事するんだい。

タジム 詳しい事情は分からねえ。ただ、マサロの連中はサラガヤの坊主の話

には耳を貸さないだろ。だから同じ非人で、マサロと仲も悪くないソマテ人が坊主になったら話を聞くかもしれないと思っっているみたいだな。

カナ  
じゃあ、タジムが逃げたらがっかりするだろうね。

タジム  
しょうがねえさ。俺がいくら御人好しだと言っても、そこまでは付き合えねえからな。

シャツポ  
そのラビナスって坊さん、夜中に天幕を突然持って行かれた契丹人みたいに、悔しがらんじやないかな。

タジム  
まあそういう事だ。どっちにしても盗人の俺達には関係ねえ話さ。大事なのは今度の仕事だ。

カナ  
じゃあ、次の新月の日。

タジム  
今度は真夜中だ。

シャツポ  
わかってるよ。

タジム  
品物は大方目星をつけた。重い物も多いし、半端な量じゃないから、

運び出すには少し時間がかかりそうだ。坊主たちが寝静まって、絶対に大丈夫だと分かったら今日みたいに笛を吹く。すぐに入ってきてくれ。もし、笛の音が聞こえなかったら何かあったという事だ。絶対に入ってくるな。

カナ

分かった。

シャツポ

タジムはそれまで坊さんの修行を続けるのか。

タジム

ああ、新月の日までは、せいぜいラビナスを喜ばせてやるさ。

(遠くにラビナスの声が聞こえて来る。暗転)

第六幕

転びの集会で説教をするラビナスとタジム。上手の説教台の上に立つラビナスと、その下のタジムが交互に話す。

ラビナス

遙か西の彼方にイジプトという国があり、そこにはニールという河が流れている。東方のチーニーにも黄河という河がある。どちらも天が下にこの河ありと言われる大河で、人々は畏怖の思いでこの河に頭を垂れる。では、ひとたびその河の水を粗末な器に入れたらどうなるか。

## タジム

それはもはやニールでも黄河でもない、ただの粗末な器に入った一杯の水となり、だれも見向きもしなくなる。そしてここにも真理があるのです。よろしいか、すべての偉大なものは、帰属すること、そこに加わる事にこそ意味があるのです。離れていては、いかなる恩恵も受けられない。お前達の目の前にある大河はサラガヤという河です。近隣の諸国民が畏怖の思いで頭を垂れる偉大な大河です。

(下手より登場)ラビナス様の仰る通りです。偉大なサラガヤに比べると、マサロやソマテは取るに足らない者です。大きな河どころか、四方を乾いた砂漠に囲まれた貧しい土地です。だからこそ、たとえ粗末な器の、たった一杯の水でも、それが命を救う大切な神様の恵みである事を知っているのです。たった一杯の水に心底感謝できる、そんな喜びもあるのです。

## ラビナス

この地の太陽は、なぜ炎熱の刃を持ってお前達に襲い掛かるのか。砂の嵐はなぜお前達を苦しめるのか。自らの胸に手をあてて考えてみるが良い。神とサラガヤに背を向ける者は、その罪を悔い改めよ。

## タジム

そうです。悔い改めなければなりません。この地に生きる者がもし、不平不満を口にするならば、その者は心を改めなくてはなりません。なぜなら、灼熱の太陽だけでなく、神は夕暮れの涼やかな風も運んでくださるではないですか。厳しい一日が終われば、満天の星空で私達

を慰めてくださるではないですか。神はこの地の人々の辛い毎日をご存知で、それを心に留めてくださっているのですから。

ラビナス

サラガヤに従うのです。

タジム

共に歩みましょう。

ラビナス

今こそ偉大なサラガヤの哀れみが、マサロの地にあまねく行き渡り、お前達非人にも救いの門戸が開かれたのです。

タジム

ソマテ人の中でも人一倍頭の悪い私が僧侶になれるとしたら、神様がみんなを見捨てる訳がないだろ。

僧・オンドル

(登場し、ラビナスの傍に)ラビナス様、タジム殿の説法は、あのままです。よろしいのですか。

ラビナス

放っておきなさい。今は転びの数が増えるに任せるのです。

僧・オンドル

しかし、

ラビナス

今は転びの数が増えれば良いのです。

僧・オンドル はい、

ラビナス

(独白) 手段を選んでる時間はない。頑固なマサロ人達に、まずはサラガヤに従う習慣をつけさせれば良い。啓蒙はその後です。タジムは私の手元に残った最後の札、私はこの一枚に、すべてを賭けましょう。  
(暗転)

## 第七幕

新月の数日前、僧達の荷造りを見ているタジム。

タジム

ダメですよ、ダメ。そんな結び方じゃ、サラガヤ本国への長い道のり、駱駝の背中で揺られて荷物は解けてしまいます。

僧・ムアティー

じゃあ、どのように結べばよろしいのですか。

タジム

お見せしましょう。それはですね、ほれ、このように、こうして、こうやって、そしてこうやれば、出来上がりでございます。

僧・ジュテ

ほう、

僧・ムアティー

なかなか、

僧・ジユテ

慣れた手つきでございますな。

タジム

なぜタベの内になさらなかったのですか。今日これからお立ちという時に、荷造りなど、

僧・ムアティー

何を仰っているのですか。ラビナス様と、お供をする私の荷物はどうに出来ております。あらかじめ分かっていたのですから。これは、貴方様の分でございますよ。タジム殿。

タジム

えっ、

僧・ジユテ

お聞きではないのですか。先程コンパーレさまが、タジム殿も是非サラガヤにお連れするようと、使者を使わして告げてこられたのです。

僧・ムアティー

ラビナス様に命じられ、露營の寝具と、替えの僧衣を入れておきました。

タジム

困ります、私は、サラガヤには行けません。

僧・ムアティー

これは異なる事を、邦司の命をお断りになる事が出来るとお思いですか。

僧・ジユテ

よろしいではございませんか。アスカリナに残る私などは、羨ましい

限りでございますのに。

タジム

しかし、

僧・ジユテ

あゝ、久しぶりに本国に帰りたいものです。

タジム

私は、私は、サラガヤに参る訳には……。

(暗転)

第八幕

サラガヤ本国。コンパールの屋敷。メデイナの部屋。上手に座っているメデイナ。下手に端女のオルガ。

オルガ

お嬢様、一年ぶりにお戻りになった父君にご挨拶もなさらないとあつては、このオルガがコンパール様からお叱りを受けます。

メデイナ

言ってるでしょ、今は会いたくないの。

オルガ

せめて一目だけでもお顔をお見せください。ご挨拶もないということでは申し訳も立ちません。

メデイナ

気分がすぐれないから休んでいと伝えてちょうだい。

(下手よりコンパーレ、兵士を従えて登場)

オルガ

(コンパーレに会釈)お嬢様は元気でいらっしやるし、オルガには偽りは申せません。

メディナ

オルガ、あなたには私の気持ち(コンパーレに気づく)……。

コンパーレ

メディナ、どうしたと言うのじゃ。

メディナ

……お帰りなさいませ、お父様。

コンパーレ

一年ぶりだぞ。父に笑顔を見せておくれ。なぜそのように難しい顔をしておる。

メディナ

難しい顔など、しておりません。

コンパーレ

明日は、紀元節の祝いじや。晴れ着は仕立てあがっておるのであろう。着て見せてはくれんかの。

オルガ

それがよろしゅうございます。今、お持ちいたしましたしよ。

メディナ オルガ、余計な事をしないで。

コンパール メディナ、

メディナ お父様……お父様は、罪無き人をあやめたりなさるのですか。

コンパール ん？どうしたというのじゃ。なぜそのような事を尋ねる。

メディナ ……。

コンパール オルガ、ワシの可愛い娘は、何をすねておるのじゃ。

オルガ 申し訳ありません。私めの落ち度でございます。何者かが、良からぬ噂をお嬢様のお耳に入れた様子でございます。

コンパール 噂……メディナ、一体どんな噂を誰から聞いたのじゃ。

メディナ お教えしたら、その者も……亡き者になさるおつもりですか。

コンパール ん、(笑) お前に、誰がどんな話をしたのかは知らんが、お前の父は、サラガヤ国王の忠実な僕じゃ。サラガヤの正義を異邦の蛮族達に広めるために命をかけておる。それは、邪教や愚かしい迷信にあえぐ者、

圧制に苦しむ者達を助けるためじゃ。

メディナ

本当ですか。

コンパール

本当じゃとも。確かにワシは、国王より五千の兵を任された邦司じゃ。戦になれば、血を流す事もある。しかし、自ら殺生を好む事は無い。サラガヤの信義と、種族の誇りを守るためにやむなく戦う時以外にはな。

メディナ

信じてても、よろしいのですね。

コンパール

無論じゃ。父がお前に偽りを申した事があるか。

メディナ

：：お父様、お赦してください。ひどい事を口にしてしまいました。

コンパール

気にするでない。口さがない者達は、どこにでもおるものじゃ。羽音のうるさい虫も、刺さぬ限りはいちいち気にとめたりせん事じゃ。

メディナ

刺さぬ限りは、でございますか。

コンパール

メディナ、またそのように、

メディナ もうし訳ございません……。

コンパール そうじゃ。お前に会わせたい者がおったのじゃ。今ここに呼んでも良

いか。

メディナ 突然何を仰るのですか。私は、誰とも会いたくはありません。

コンパール 若い男だぞ、とは言っても色気には縁の無い類じゃがな。(笑)

メディナ 若い男など、なお更会いたくありません。お父様もご存知の筈です。

私が知らぬ者と会うのを好まない事を。

コンパール そのような事を言わずに、父のたつての頼みじゃ。一度だけ会ってくれ。顔だけは見せておいた方が良いような気がするのじゃ。

メディナ どういう事ですか。

コンパール いや、とにかく会ってくれ。

メディナ いやでございます。

コンパール お前に会わおせるために、わざわざアスカリナから連れてきたのじゃ。

話をしたくなければ何も話さんでも良い。顔を見せるだけじゃ。

お父様、なぜ私をその者に会わせようとなさるのですか。その者は誰  
なのですか。

コンパーレ 僧侶じゃ、修行中のな。

メデイナ お坊様、

コンパーレ ラビナスのもとで経典を学んでおる。

メデイナ ラビナス様のもとで……。

コンパーレ 会ってくれんか。

メデイナ ……分かりました。そのかわり、私とオルガだけでお会いしとうござ  
います。

オルガ お嬢様、

コンパーレ オルガと二人だけで会うと申すか。またなせに。

メディナ

はい、私も近頃は經典を学んでおります。ですから、お坊様でしたら、お尋ねしたい事もございます。一人で学んでも理解できない事です。命の深遠や、人を慕う気持ちの生まれる訳など。でも、お父様がそばにおいででは何やら気恥ずかしく思えてしまいます。

コンパーレ

そうか、分かった。お前の言う通りにいたそう。(兵士に)タジムをこれへ。

兵士

はっ、(下手)

コンパーレ

僧侶とは言っても、この者はまだ成り立てじゃ。あまり難しい事を尋ねても答えられんかも知れん。長い話をする必要はないのじゃ。一度会っておけばそれで良い。

メディナ

どうしても会えと仰ったかと思えば、今度は、長話をするなど仰る。お父様、私には分かりません。

コンパーレ

いやいや、つまり、お前の好きなようにして良いという事じゃ。すぐに終わろうが、長話になろうがな。会う事が肝心なんじゃ。

メディナ

お父様、

兵士

お連れ致しました。

タジム

(下手よりタジム、兵士の後から、おずおずと登場)失礼します。

コンパーレ

(タジムにもそつとこれへ。この者はタジムと申す。見習の僧じやが、ラビナスの話では知識より靈感に長けておるといふ事じや。(タジムに)ワシの娘メデイナじや。余談じやが、その名前は妻の好きじやつた花、キンポウゲからとつておる。ま、その事は心得ておるであろうが。ちと人見知りする性質じや。そして、これなるはオルガ。妻が亡くなつてからは、メデイナの母親代わりとして、

メデイナ

お父様、私の話すことがなくなつてしまいます。

コンパーレ

お、そうじやつたな。よしよし、父は早々に退散致そう。オルガ、兵卒二人を部屋の外に残しておく。何かあつたら呼びなさい。

オルガ

かしこまりました。

コンパーレ

(下手に向かうが立ち止まり)タジム……その、何じや、やはり霊の目で見て、霊の耳で聞くのであろうな。いや、門外漢のワシが余計な事じやつた。くれぐれもよろしくな。

タジム

はい。

(コンパレーレ退場。兵士達も後に続く)

オルガ

今、お茶を持たせませす。(上手に向かう)

メディナ

お茶はオルガに入れて欲しいわ。

オルガ

でも、お嬢様、

メディナ

他の誰が入れてもあの味は出せないもの。タジム様、本当に美味しいんですよ。是非、オルガの入れるお茶を召し上がってください。

タジム

ありがとうございます。

オルガ

お口に合いますかどうか。

メディナ

オルガ、燕麦の焼き菓子も添えて欲しいわ。

オルガ

時間がかかってしまいますが、

メディナ

いいのよ。タジム様に美味しいお茶を召し上がって頂きたいのですか

ら。

オルガ ……お二人だけに……。

メデイナ 何を心配しているの。神にお仕えしておられる方とお話をするのですよ。それに、部屋の外には兵士も控えています。

オルガ ……承知致しました。(上手に退場)

メデイナ ……あちらは、暑いのでしょうかね。

タジム マサロですか。

メデイナ 父が赴任しているアスカーナです。

タジム アスカーナですよ、マサロの。暑いです。砂漠ですから。駱駝だって暑さで死ぬ事があります。

メデイナ 大変な所ですね。

タジム 比べたら、こちらは天国です。

メデイナ

ラビナス様から、神の教えを学んでおられるのですね。

タジム

忙しい人なので、そんなに話せるわけではないです。

メデイナ

ラビナス様は、お元気ですか。

タジム

はい、

メデイナ

そうですか……あの、

タジム

はい、

メデイナ

……タジム様は、私の父をどう思われますか。

タジム

コンパーレ様の事を、ですか。

メデイナ

ええ。

タジム

そうですね……正直に言わなくてはいけませんか。

メデイナ

お願いします。

タジム ……怖いです。

メデイナ 怖い、

タジム はい。

メデイナ どうして怖いのですか。

タジム どうしてって……(笑)お顔が怖い。

メデイナ そういう事ではなくて、人間としてどう思われますか。

タジム どうしてそんな事を私なんかに訊くんですか。

メデイナ いいから答えてください。

タジム 答えられません。そりゃ無理と言うものですよ。お父様は邦司ですよ。

俺、私は、ただの坊主見習です。邦司の良し悪しなんか口にしようものなら、首が飛びかねません。分かってください。

メデイナ ……分かりました。父はそうのように怖い人なのですね。

タジム  
そうじゃなくて、身分の違いですよ。

メデイナ  
：：タジム様、あなたを神に仕える方と見込んでお尋ねします。どうぞ真実をお教えください。

タジム  
真実って言われても、

メデイナ  
ラビナス様の前の祭司長は、父の命によって命を絶たれたと言う者がいます。それは本当ですか。

タジム  
えっ、

メデイナ  
父が自分の利益の為に、同じサラガヤの、神に仕える祭司を殺したと言うのです。ラビナス様のもとで学んでおいででしたら、何かご存知なのではないですか。どうぞ、本当の事をお教えください。

タジム  
：：もし、私が本当の事を知っているとしたら、そして、お嬢様の言う通りだったとしたら、どうするつもりですか。

メデイナ  
(涙)自害します。そのような人の娘として生まれ、生きていくのは恥でございます。

タジム

私は、本当に何も知りません。だけど、もしその話が本当だったとしても、お嬢様が死ぬ事はないですよ。

メデイナ

なぜ、なぜですか。父がそのような非道を働く者だと分かつて、どうして生きて行く事が出来ると言うのですか。これから先、私が經典を学び、神に心から仕えたとしても、全ては空しい事ではありませんか。

タジム

：私は、神様の教えを学んでまだ日が浅いので、經典の中からちよ  
うどいい話を探して差し上げる事は出来ません。それに、お嬢様が本  
当はどうしたらいいのか、私にも分かりません：：でも：：こんな話  
だったら知っています：：マサロの地の東にソマテという所がありま  
す。そこで一人の盗人が捕まり、広場に引き出されました。僅かな食  
い物を盗んで捕まったのですが、その辺りでは、盗みを働いた者は、  
十人の男に代わる代わる十回ずつ鞭で打たれるんです。一人が打つ  
のは十回です。だから男達はみんな、疲れることもなく、力任せに鞭を  
振り下ろすんです。合計で百回、肉がえぐれて、血が噴き出します。  
若い者でも刑が終わる頃には瀕死の状態です。そして捕まったその盗  
人は若くはありませんでした、いや、もう初老と言ってもいい。しか  
しその男には、まだ幼い息子がいました。その子は、引き出された父  
親にすがり付いて泣いていました。刑が始まり、男達が父親の背中を  
鞭で打とうとすると、その子は男達の足にしがみついて、やめさせよ  
うとするんです。振り払われ、蹴飛ばされ、自分も傷だらけになって、

それでも、何度も何度も、泣きながらしがみついでいくんです……罪を犯し、捕まった父親の為に。

メデイナ

……その子の父親は、亡くなってしまったのですか。

タジム

……分かりません。でも、話の本題はそこではなく、もしお嬢様が、この少年だったら、どうするかという事です。その子の父親は確かに罪を犯していました。それを鞭打つ男達は正しい事をしているのです。

メデイナ

……。

タジム

お嬢様は、強いお父様だけを見ている。でも人はずっと強くはいられない。長い間には、歳も取れば病気もする。お父様がお嬢様を必要とされる時が来るかも知れません。その時に、お嬢様は……死んでしまつてたら何も出来ないじゃないですか。上手く言えませんが、お嬢様の悩みは、慌てて答えを出してはいけない事のように思えます。少なくとも、初めて会った坊主の一言で、決めてしまつて良い事ではありません。お嬢様自身、もっと多くの事が見えるようになってから、考えたら良いのではないのでしょうか。

メデイナ

……分かりました。

タジム

……(正面を)この窓からの景色はすごいですね。私は、緑の山を初めて見ました。ラビナス様が言ってたけど、確かにサラガヤは美しい。こうやって自分の目で見るのと、想像していたのでは大違いです。

メデイナ

(かすかに鳥の声)聞こえますか。(耳を澄ます二人。鳥の声、高くなる)

タジム

鳥だ。

メデイナ

この辺りには本当にたくさん種類の鳥がいます。朝にはうるさいくらいです。

タジム

(口笛で、鳥の鳴き声をまねる)そうだ、(手を胸にやり、笛を出そうとする)……無い。

(暗転)

第九幕

夜の聖堂。僧・ジユテ、千鳥足で上手より登場、

僧・ジユテ

すこし、飲み過ぎです。外の風に触れて、酔いを覚ましたほうがよろしいでしょう。

僧・オンドル

何を仰いますか。ラビナス様がお留守の時でなければ、このように心置きなく飲む事は出来ないのですよ。

僧・ジユテ

いや、それはそうですが、

僧・オンドル

せっかく良い気持ちになりましたものを、何ゆえわざわざ覚ます必要がありません。 (ふらつく)

僧・ジユテ

とは申されても、そのように足元がおぼつかないようでは、

(ハンガス、下手より登場。兵・パド、兵・ガモを従えている)

ハンガス

主がいないとあって、羽目を外しておられるな。

僧・ジユテ

こっ、これはハンガス様、このような時間に何用でございますか。(僧・オンドルを後ろに隠す)

ハンガス

邦司も祭司長も本国にご帰還になっておる。アスカリナに残った千騎長が街中を見てまわり、治安の維持に努めるのは当然であります。街頭での異変は邦司に、社寺で何かあったら祭司長に、それぞれお帰りの際に報告を成さねばなりません。

僧・ジユテ

報告、お、お勤めご苦労様です。あの、夜も更けてまいりましたので、私どもは、これにて、

僧・オンドル

いかがですか、ハンガス様もご一緒に一献。

僧・ジユテ

こつ、これ、何を申されるのですか。

僧・オンドル

よろしいではありませんか。ハンガス様も我々も、同じ異邦の地で、祖国の為に汗を流すお仲間。

ハンガス

よいか、はつきり言っておく。貴様ら坊主はもはやこの地には無用なのだ。役に立つ事を期待してはおらんが、せめて邪魔をせぬように心掛けい。

僧・ジユテ

ハンガス様、

僧・オンドル

(僧・オンドル、ふらふらと舞台前に進む。鼻歌を歌うように)坊主は無用と仰いますか。

ハンガス

貴様、(劍の柄に手を掛ける)

僧・ジユテ

お、お待ち下さい、

僧・オンドル  
（床に落ちた何かに気づき）うん？（笛を拾い、吹く）

カナ（声）  
待ちくたびれたよ。

僧・オンドル  
（僧・オンドル、もう一度笛を吹く）これは虫の音のような、（ハンガスに口を抑えられる）

（ハンガス、兵士達に無言で合図、兵士達上手と下手に分かれ身構える）

シャツポ  
（下手より登場）ソマテの義賊、シャツポ参上。

カナ  
（続いて下手より登場）同じく、カナ、

ハンガス  
動くな、

シャツポ  
うわっ、

ハンガス  
サラガヤの寺に入るとは不埒な盗人、

カナ  
シャツポ、逃げるんだよ、（カナ、下手に逃げるがシャツポの前にはハンガスが立ち塞がる）

ハンガス (剣を振り上げ) 死ぬ。

(照明○F)

シャツポ(声) 助けてくれ、タジム、

## 第十幕

タジムの夢。照明薄暗く、赤い地獄絵のように、上手より引き出され、下手奥の階段を上り、上段の通路を通って上手奥に消えて行くマサロ人達。兵士達が途中で彼らを小突いている。下手よりフラフラとタジム登場。

ハンガス

(上手スポットに浮かぶ) 女の方は取り逃がしましたが、逃げ遅れたそのコワツバ、行き場をなくした鼠のたとえの通り、こしやくにもこちらに飛び掛って来るではありませんか。一刀両断にしてください。  
(高笑)

タジム

(上手スポット) くそ、シャツポを、シャツポを返せ。(ハンガスに向かって) いこうとするが兵士達に取り押えられる)

ラビナス(声)

タジム、お前は分をわきまえていますか。

兵・ザツパ

(罪状書きを持って中央で) お前達は、非人に生まれた罪により刑に処

される。

兵・ガモ  
支配者に不忠なる罪により、刑に処される。

兵・パド  
異端の神に祈りし罪により、刑に処される。

兵・ザツパ  
往來の中央を歩きし罪により、

兵・パド  
我々の目を直視したる罪により、

兵・ガモ  
声を立てて笑った罪により、

兵・パド  
刑に処される。

兵・ガモ  
刑に処される。

ハンガス  
(奥の通路の上、上手より。シヤツポの首に劍をあて、高笑)このワツ  
パも、貧しき家に生まれし罪により、刑に処される。

シヤツポ  
タジム、どうしてだよ、笛が、笛が聞こえたのに……。

タジム  
シヤツポ、シヤツポ、シヤツポ、

ラクサーダ(声) 生きとし生ける命は、砂漠の風紋と同じ。現れては消え、消えてはまた現れる。

タジム シヤツポ、すまねえ、すまねえ、

ラクサーダ(声) もし、生き長らえたら、違う生き方が出来ますか。(響く)もし生き長らえたら、違う生き方が出来ますか。

タジム シヤツポ、

マサロ人達消えて行く。舞台中央に座り込んでいるタジム。

モキ (下手より登場)……タジム様、(明るくなり、)

モキ タジム様、

タジム やあ、

モキ タジム様、もう、かれこれ三日になります。

タジム えっ、

モキ

…ハンガス様の話をお聞きになってから、ずっとそのように塞ぎ込んでしまわれました。あの者達は…もしやと思うのですが。

タジム

…そうだよ。ハンガスの手にかかって死んだ盗人は、俺の仲間だった。

モキ

タジム様、

タジム

俺が、あいつを殺しちゃった。

モキ

…。

タジム

やっぱり俺は、あの刑場でラクサーダと一緒に死んでしまっただけ良かったんだ。そうすりゃあ、シャツボは、死なずに済んだ。

モキ

…タジム様。

タジム

そうさ、俺はただの盗人だよ。どこまで行っても生まれ変わる事なんかできねえ、薄汚え盗人なんだ。変わろうって気も更々ねえ。ラビナスに伝えてくれ。俺はもう降りるつてな。だから、首をはねるなり、刺し殺すなり好きにしてくれつて。

モキ 何を仰っているのですか。

タジム モキ、お前は知らねえだろうが、ラビナスは俺にラクサーダの真似事をさせようとしているんだ。

モキ 知っています。

タジム ……そうか、だったら話は早いな。俺はラビナスの話に乗ったふりをしながら、逃げ出す機会を待っていた。だけど、俺のせいで仲間が殺された。そいつは、俺の兄弟みたいな奴だった……だから、俺はもう、生きていたくねえ。

モキ タジム様、だったら、死んだつもりでラクサーダになれば良いではありませんか。

タジム ……何だって。

モキ あなたならマサロの、いや、サラガヤやソマテにとつても聖者になれるという事です。

タジム 俺はそんな者にはなれねえし、なりたくもねえ。俺はただ、死にたい

んだよ。生きててこんな思いするんだったら……本当に、あの時死んでしまった方が……。

モキ

タジム様、初めてお会いした時は、私もあなたをただの盗人だと思っ  
ていました。ラビナス様が、コンパレー様やハンガス様との駆け引き  
の為に利用されるだけの、捨て駒だと。でも、あなたがマサロ人達に  
話している姿を見て、私は、ふと思ったのです。もしかしたら、あな  
たは本当に、

タジム

やめてくれよ、俺はただの盗人だ。いや、それ以下かも知れねえ。

モキ

……。

タジム

なあ、俺は何の為に生まれてきたんだ……考えてみたら、俺は物心つ  
いた時から人の目ばかり窺って生きてた。一つ所に長く住んだ事もな  
けりや、自分の物と他人の物の区別をした事もねえ。何かが入用だっ  
たら、他人の家に入ってくすねて来た。いつもビクビクしながら、そ  
れでいて、得意になってた。盗まれる奴が馬鹿なんだ、俺には、盗ま  
れるものなんか何もないって、盗まれた奴の痛みなんか考えた事もな  
かった。だけど、シャツポ……一番大事なものを持ってかれちまった  
……天罰だよな。赦される筈はねえ。だから俺はもう死んじまいた  
んだ。

モキ ……死んだからって、赦されはしません。

タジム ……そうか、そうだよな。

モキ 「心に負った負債には、倍の利子をつけて返しなさい。しかも、借りた人にだけではなく、求めて来るすべての人に」……ラクサーダの言葉です。

タジム ……ラクサーダ。

モキ 心に負った負債とは、過去の過ち。それを返済するのは、これから積み上げる善き行いです。しかし善き行いという返済は、負債の分だけ返すのではなく、惜しみなく返し続けなさいという事です。

タジム 何でお前が、ラクサーダの言葉を、

モキ 私が、ラクサーダの教えを信じる者だからです。

タジム

モキ、

モキ

：サラガヤを出た時は、私も神の教えを学べる事に心を躍らせ、卑しい身分の私を僧侶に取り立ててくださったラビナス様に感謝もしていました。しかし、このアスカリナに来て、ラビナス様に仕え、私はサマシタールの教えを布教するサラガヤの本当の目的を知ったのです。

タジム

目的、

モキ

サラガヤは、他国に兵を進める時には必ず僧侶達と一緒に連れて行きます。兵士が力で従えた異教徒を僧侶が神の教えによつて忠実な僕とせず。抵抗する心を残さない為です。ですからサラガヤの占領地においては、僧侶も実質的な成果を求められません。兵士が戦に敗れる事は死を意味しますが、布教に失敗したサラガヤの僧侶も同じ事なのです。

タジム

：ラビナスは、マサロに来た二人目の祭司長だよな。

モキ

その話、もう誰かにお聞きになったのですか。

タジム

詳しい事は知らねえ。

モキ

ラビナス様の前の祭司長は、コンパーレ様の命によりハンガス様に殺

されたたと言う噂です：真相は分かりませんが、邦司コンパーレ様と言えど国王の前では一介の家臣、領地を任された時には良い知らせを国元に伝えたいのです。マサロ人がサラガヤに忠誠を誓わないのは布教が上手くいっていないせいだ、それなら祭司長を替えてしまえとお考えになったとしても、不思議はありません。

タジム

ラビナスが、なぜ俺を助けたのか、やつとはつきりしたよ。

モキ

：ラビナス様に命じられ、マサロ人に成りすましラクサーダの話聞きに行った事がありました。なぜラクサーダが、マサロ人の心を捉えているのかを探り出す為です。それは不思議な光景でした。威厳や格式にとらわれた説法ではなく、まるで友人や家族に語るように、優しく語る彼の言葉は、虐げられてきた人々の心に深く染み入るものでした。そして、サラガヤでマサロ人達と同じような境遇に生まれた私の心にも、深く染み込んだのです。

タジム

：：そうか。だが、俺はラクサーダじゃねえ。

モキ

転びの集会でのあなたの言葉は、素晴らしかった。ラビナス様の言葉を上手く使いながら、でもまったく違った結論を導き出していました。

タジム

ラビナスをからかっただけだ。

モキ

そうではありません。あなたは無意識の内に、虐げられた者たちの心を代弁していたのです。だから私は思ったのです。ラクサーダがしようとしていた事を成し遂げるのがあなたなのかも知れないと。

タジム

俺は、そんなんじやねえよ。

モキ

ラクサーダの教えを学んでください。私は彼の書き残した教えを持っています。

タジム

俺は、字なんか読めねえ。

モキ

私がお教えします。

タジム

なぜ、俺なんだ。

モキ

あなたには、人の心を捉える何かがあります。それに、ラクサーダは語ることを禁じられた聖者でしたが、あなたには語る場所も与えられているのです……きっと、偶然ではないのですよ。

タジム

……偶然じゃない。

モキ

あなたがここにいる事です。ラクサーダの言葉で命を救われた貴方が、ラビナス様の操りになるような人では無くご自分の言葉で語る素養を持つておられた。ラクサーダはすべてを知っていたのではないでしょうか。そうでなければなぜ、東の山よりいずると言ったのですか。

タジム

ラクサーダがすべてを知っていたなんて、そんな、馬鹿な話があるもんか。第一、ラクサーダの生まれ変わりがサラガヤの僧侶になる筈はねえ。

モキ

ラクサーダの教えを知らないからそう思うのです。彼は、マサロ人もサラガヤ人も共に救おうとしていたのです。種族と、身分の違いと、う呪縛から。

タジム

だとしても……俺は、そんな器じゃねえ。俺は、ラクサーダなんかじゃ……。

(暗転)

## 第十一幕

上手奥の僧・ジュテと、下手奥の僧・オンドルにスポット。中央机に向かっているタジム

はシルエット。

僧・ジユテ

何があったのかは存じませんが、近頃のタジム殿、確かに学ぼうという姿勢だけは見えますな。

僧・オンドル

確かに、そのように見えはしますが、ろくに文字が読めないのでは、無駄な努力でございましょう。

僧・ジユテ

もしや転びの集りで、ご自分の話が少しばかり非人どもに受けたので、勘違いしてしまわれたのやも知れません。

僧・オンドル

サマシタールの教えを理解出来ると、思われたのやも知れません。

僧・ジユテ

げに恐ろしきは生まれ育ちの卑しさでございませぬ。

僧・オンドル

まことにさよう。厚かましきものでございます(声をひそめ)ラビナス様のお気が変われば、今すぐにも叩き出してくれましょうに。

僧・ジユテ

まことにさよう。今すぐにも叩き出してくれましょうに。

僧達のスポットF O、タジムのスポットF I。書き取りをしている。

モキ(声)

もともとマサロ人は文字を持っていません。だから、ラクサーダの言葉もサラガヤの文字で書かれています。

タジム(声)

經典の文字も、同じだ。

モキ(声)

そうです。古語のサマラ語も読み方や使われている単語が異なるだけで、文字そのものは同じです。だから、昼間は經典を写して文字を覚えてください。夜になったら私がラクサーダの言葉をお教えいたしましょう。

モキ

(下手より登場)タジム様、どこまで進まれましたか。

タジム

やっと少し読めるようになった。これが、人、これが、頼る、えっと、

モキ

それは願い、

タジム

あ、そうか、それで、実りと、

モキ

そうです、随分進んだじゃないですか。

タジム

じゃあ、人に頼る、願いだな。それで、こっちは、えっと、

モキ もたらず、です。

タジム なるほど、じゃあ、人に頼る願いがもたらず実りだ。

モキ これは、

タジム えっと、この鉤型のは何だっけ。

モキ 叶える、です。

タジム そっか、(指で書きながら)か、な、え、る……ああ、やっぱり問題は文字だな。

モキ 解釈は、お分かりだと仰るのですか。

タジム ああ、文字さえ読めればな。

モキ 本当ですか。じゃあ、一度私が読んでみましょう。人に頼る願いは叶え難く、そのもたらず実りも小さい。自らに頼る願いは叶え易く、その実りは大きい。ようするに前文から推測しなくては分からないのですが、その意味はですね、

タジム

こういう事さ。例えば、朝起きて、今日一日、善い人とだけ出会いますようにするのは、人に頼る願いだ。もしその願いが叶っても、ただ運が良かっただけで、明日もそうとは限らない。それより、今日一日、出会う人みんなにとって、自分がいい人間でいられるようになって願えば、それは自分の努力だ。出来た時には自分が成長してるんだ。

モキ

完璧です。

タジム

だが、文字は問題だ。

モキ

タジム様、大丈夫です。この分だと三月もしないうちにラクサーダの言葉をすべて覚えてしまわれますよ。

タジム

いや、覚えるだけじゃダメなんだ。

モキ

えっ、

タジム

ここに書いてある。

モキ

(覗き込み)賢者の教えは、言葉を学ぶより、その心を学ぶ事に価値がある。なるほど。(驚き)読めてるじゃないですか。

タジム

それ位だったらな。

モキ

タジム様……。

僧・ジユテ

(タジムのスポットF〇、僧達のスポットFⅠ)

驚きました、驚きました。今朝方、本殿の裏手より、何やら声が聞こえます。覗いて見ますればあのタジム殿が経典を読んでおいでなのです。その声がまた激みなく、流れるようにスラスラと。サラガヤから戻られてまだ三月、一体何がございましたのやら。

僧・オンドル

タジム殿と言えばこの前の、転びを集めた夜会での事。ラビナス様が引用された地の神ダルの箴言の、章の違いをお気づきになり、そつと耳打ちなされたのです。珍しくコンパーレ様がおいでで、ラビナス様は大慌て。なんとか気づかれずに済んだのですが、この寺に来てまだ半年。タジム殿に、一体何があつたのでしょうか。(僧達のスポットF〇、タジムとモキのスポットFⅠ)

モキ

この言葉、いいですね。幸せになりたくば、物に足る事を知り、徳を積む事に貪欲でありなさい。

タジム

モキの好きな言葉か。分かりやすく率直なラクサーダらしい言葉だな。

モキ

タジム様にもお好きな言葉がございますか。

タジム

どれも好きだ。

モキ

どれか一つ仰ってください。

タジム

(ラクサーダの書をめぐり)これなんか、近頃よく考えてるよ。序列では、形ある物はすべて形のない物の下にある。勇気に勝る剣はなく、思いやりにまさる食物もない。人は振り上げる前に勇気を働かせ、与える前に思いやる気持ちを持つのだ。結果は神の領分で、心にいただく思いが人の領分だ。

モキ

結果は神の領分で、心にいただく思いが人の領分……あの、分かりやすく説明していただけますか。

タジム

それは、だな……。 (タジムとモキのスポットF O、僧・ジユテのスポットF I)

僧・ジユテ

近頃は、我々古参の僧の中にも、タジム殿に教えを受けるものが出る始末。あの下品な物腰も影をひそめて、タジム殿に一体何があったのでしょうか。

僧・オンドル

一体、何があつたのでしょうか。

(暗転)

(中央で書き物をしているタジムのシルエット。下手のスポットF I、カナが立っている。タジムのスポットF I)

タジム

モキ、今日は天体の運行だよ。ラクサーダが残してくれた言葉は、これですべて目を通した事になる。(返事がないので振り返る)……カナ、

カナ

久しぶりだね、タジム。

タジム

……無事で、良かった。いや、逃げおさせたつてのは、聞いてたんだ。

カナ

タジム、迎えに来たんだよ。今日こそ、ここを出るだろ。

タジム

カナ……俺は、

カナ

ごめんね。あたいがもつとしっかりしてりや良かったんだ。シャツポを守つてあげれなかった。だつてさ、打ち合わせ通りに、笛が聞こえたからさ、あたしもシャツポも安心しちゃつて、

タジム

カナ、

カナ  
分かってるよ。何か訳があつたんだよね。タジムがあたいやシャツポを裏切る訳ないもんね。

タジム  
…俺は、あの時、

カナ  
話は、後からゆつくり聞くよ。とにかく、早くここを出ようよ。

タジム  
すまない、カナ…俺は、ここに残ることにした。

カナ  
…そう…そっか、そういう事か。

タジム  
カナ、

カナ  
じゃあ、坊さんになるんだね。

タジム  
色々、あつてな。

カナ  
(叫ぶ)ふざけるんじゃないよ。

タジム  
…。

カナ

初めからその気だったんだね。あたいとシャツポを裏切ったんだ。そうか、そうなのか：：そりゃあ、こんないい暮らししてりゃ、わざわざ盗人に戻って苦勞するなんて馬鹿らしくもなるよね。だけどさ、だけど、だったら何であんな話をしたのさ。あたいてもシャツポもあんたを信じてた。あんたを信じて、信じて：：シャツポは、殺された。かわいそ過ぎる、シャツポが、シャツポが、かわいそ過ぎる：：いいかいタジム、あんたはもう仲間じゃない。あんたは、シャツポの仇だ。あんたが仲間を裏切っても、あたいは絶対にシャツポを裏切らない。だから、あんたを赦さない。(隠していたナイフを取り出す)あたいは：：あたいは、シャツポを裏切らない。(カナ、ナイフを振り上げる。タジム覚悟を決める。カナ、刺せない。意を決したようにタジムの太ももを刺し、ナイフを抜く)助けてやったんじゃないよ：：あんたなんか、殺す値打ちもない男だ。

モキ

(下手より登場。異常に気づき)タジム様、誰だ、

タジム

(制するように)モキ、

(カナ、暫くタジムを見ているが、下手に消える)

モキ

大丈夫ですか、タジム様。なぜ、あの者を。

タジム

モキ……これでやっと、ソマテのタジムは死んだんだ。（暗転）

## 第十二幕

アスカリナにある邦司の公邸。ラビナスを中央に、上手、前にコンパーレ、下手奥にラビナスとハンガス、上手下手の更に奥に兵士達が立っている。

ラビナス

コンパーレ様、急なお召しとあつてこのラビナス、取るものもとりにえず駆けつけた次第でございますが、いかなるご用向きであられますか。

コンパーレ

うん、一つは、坊主達の事じゃ。ハンガスから留守中の報告を受けたのじゃが、この地の坊主達の中には、気の緩んだ者がおるらしいな。お前の留守を良い事に聖堂の中で夜な夜な酒盛りをしておったそうじゃが。

ラビナス

はい、まことに、申し開きの言葉もございません。私もハンガス殿からお聞きして、醜態を晒した者には、厳罰を加えたところでございます。遅きに失する話ではありますが、綱紀粛正を必要とする者にはこのラビナス、

コンパーレ

まあ、それは微細な事じゃ。その叱責のためにお前を呼んだ訳ではない。それは、知らぬ顔も出来ぬという程度の話じゃ。

ラビナス

申し訳、ございません。

コンパーレ

今一つは、懸案の南の城壁じゃ。街道の並び、家屋の分布から見て、アスカリナの街は南からの攻めに脆い。じゃによつて、城壁の構築は急がねばならん。

ラビナス

はい、その事につきましては、

ハンガス

今朝も、斥候の者がアスカリナの南で、匪賊と思しき一群が東に向かうのを見ております。

コンパーレ

百や二百で徘徊する匪賊など恐るるに足らんが、サラガヤを取り巻く状況も時時刻々と変わつておる。アスカリナでも、他国の動向には気を配らねばならん。

ラビナス

はい。

コンパーレ

お前も聞いておるであろう。過日、サラガヤ本国に東の蛮族どもが使者を遣わして、交易の申し入れをしてきたと言う。三十騎ほどの手勢

をつれた剛の者であつたらしいが、国王がお会いにならなかつたので、その非礼をなじつたと言う。もちろん、その場で一人残らず首を打れたとの事じゃがの。サラガヤが栄えれば擦り寄ってくる者も増え、妬む者もまた増える。敵も味方も増えるという事じゃ。

ハンガス

我々武人は、益々忙しくなるという事でございます。

ラビナス

心中お察し申し上げます。

コンパーレ

そこで、話は元に戻るが、このアスカリナの街、南の城壁の完成は何としても急を要する。

ラビナス

それにつきましては、

ハンガス

もちろん、壁を作るのはマサロの人足たちで、祭司長のラビナス様がお作りになる訳ではありませんが、この人足どもが思うように働いてくれません。元々怠け癖のある無能なもの達ではありますが、城壁の構築にはあからさまに造反する者もおりますし、そのような者を見せしめに痛めつけると、翌日は皆が示し合わせて作業を拒むのです。

コンパーレ

ラビナス、なぜマサロ人達はいつまでたつてもサラガヤになびかんのじゃ。サラガヤの神に帰依する者の数もあまりに少ない。

ラビナス

ここに来て、徐々にはありますが、転びの数も増えてきておられます、今しばらくお時間を頂きたいと、

ハンガス

どれくらい時間があれば良いのですかラビナス様。二日ですか、三日ですか。

ラビナス

ハンガス殿、

コンパレー

なあラビナス、ワシは近頃建前よりも実を取る方が良いと思えてきた。お前の考えで、ワシが僧侶として学ぶ事を許したあのタジム、確かに非人ではあるが、あの男の話にはマサロの者達も耳を傾けると申すではないか。メデイナもいたく感服しておった。あの者は何やら特別な力を持っている、そのように申しておったな。

ラビナス

：：確かに、見所はありますが、サマシタールの教えについては、まだまだ、

コンパレー

白でも黒でも色は構わんのじゃ。ワシは鼠を獲る猫の方が良い。

ラビナス

：：。

コンパーレ

ラビナス、疲れておるのであろう。少し休んでみてはどうじゃ。

ラビナス

恐れながらコンパーレ様、状況は改善致しております。いましばらくお待ちいただければ、必ずや、

コンパーレ

もう、随分待ったのじゃ。

ラビナス

コンパーレ様、私を切り捨てるおつもりですか。サラガヤに私を呼ばれたのもコンパーレ様です。私が自ら望んでこの地に来た訳では、

コンパーレ

恨み言を申すな。ワシも国王には一日も早くサラガヤの統治を完全なものとするにと、きつく言われておるのじゃ。ワシにも立場というものがある。お前の後は、あのタジムにやらせてみようと思う。

ラビナス

コンパーレ様、それではあまりにも、人の道に外れた、

ハンガス

ラビナス様、お控えなされ。

ラビナス

あのタジムにしても、私の考えで、

コンパーレ

見苦しいぞラビナス。

ラビナス

…。

コンパーレ

お前は、少し疲れておるのじゃ。サラガヤに帰ってゆっくり休むが良  
い。

ラビナス

コンパーレ様、どうぞお赦しを、

コンパーレ

善は急げと申す。これよりすぐに立つが良い。

ラビナス

コンパーレ様、

コンパーレ

ハンガス、道中の安全の為に護衛を数人つけるが良い。

ハンガス

特に選りすぐった屈強な者をお付けいたしましょう。

ラビナス

コンパーレ様、何卒、何卒、お慈悲を、

コンパーレ

くどいぞ、ラビナス。

ラビナス

いやごさいます。(コンパーレにすがりつこうとする)コンパーレ様、

コンパレー

(払いのけ)無礼であるぞ、

ハンガス

(引き離しながら)ええい、何をするか、

ラビナス

(兵士達に取り押えられる)コンパレー様、コンパレー様、それではあ  
まにも、コンパレー様(泣き出す)

コンパレー

ハンガス、

ハンガス

はっ、(兵士達に)押さえておけ、

ラビナス

な、何卒、何卒、お慈悲を、

ハンガス

(剣を抜く)ラビナス様、そのように死に急がずとも、夕刻には時が来  
ましたものを。(剣を振り上げる)

タジム

(下手寄り登場)お待ちください。

コンパレー

タジム、

ハンガス

何用だ。誰が入って良いと申した。

タジム

ラビナス様には外で待つようにと言われておりましたが、ただならぬ声が聞こえてまいりましたので失礼させていただきました。

コンパール

タジム、この事は、気にするでない。それより、ラビナスは少し疲れて、祭司長の勤めを降りたいと申しておる。そこでワシは是非お前にラビナスの後を継いでもらいたいと思うのじゃが。どうじゃ。

ハンガス

ありがたい話ではないか。当然受けるであろうな。

タジム

何よりもまず、ラビナス様を、(ハンガスに促され、兵士達ラビナスを放す。タジム、ラビナスの元に駆け寄る)大丈夫でございますか。

ラビナス

タジム、

タジム

ラビナス様、今夜はもう帰りましょう。

ハンガス

それはならんぞ。

タジム

いえ、帰らせて頂きます。

コンパール

タジム、サラガヤにはサラガヤの流儀と言うものがある。おいおいお前にも分かるであろうが、

タジム

私にも私の流儀がございます。ラビナス様を残してここを去るのは、私の流儀に反する事でございます。

ハンガス

おのれ、下郎の分際で、

コンパーレ

ハンガス、(ハンガスを制し)タジム、祭司長になりたくはないのか。

タジム

：：コンパーレ様、このアスカリナでは、長い間、不幸な時代が続きました。マサロやソマテにとって、そしてサラガヤにとってもです。お望みでしたら、私はこの不幸な時代を終わらせてご覧に入れます。

コンパーレ

心強い事を申すではないか。

タジム

ただし、ラビナス様を含め、これ以上一滴の血も流さない事、それが私の、お話をお受けする条件です。

ハンガス

条件だと、図にのるのも大概にせい。

コンパーレ

(ハンガスを手で制して)面白いではないか。ワシがその条件を飲んだとして、お前はどのようにしてマサロの者達を変えていくつもりじゃ。

タジム

マサロ人を変える必要はありません。サラガヤがマサロを家畜のよう  
に飼い馴らそうとしなければ良いだけの事なのです。

ハンガス

甘い顔を見せればつけ上がるだけだ。

タジム

そうでしょうか。私にはサラガヤが聞く耳を持っていれば、多くの問  
題はもつと簡単に解決できると思えます。例えばアスカリナの南に築  
こうとなさっている城壁です。

ハンガス

話を聞いておつたな。

タジム

漏れ聞こえてまいったのです。

コンパーレ

続けるが良い。

タジム

このままではあと二年、いや、三年経っても完成する事はないでしよ  
う。私なら半年で終わらせてご覧に入れます。

ハンガス

たわけた事をぬかしおつて。

コンパーレ

半年と申すか。

タジム

はい。

コンパーレ

邦司との約束を違える事の意味を知らぬ訳でもあるまい。申してみよ、どのように致すのじゃ。

タジム

マサロ人の好きにさせるだけでございます。

コンパーレ

どういう意味じゃ。

タジム

コンパーレ様、ハンガス様、あなた方サラガヤ人は、あまりにもマサロを知らな過ぎるのです。

ハンガス

何だと、

タジム

マサロ人は誇り高い種族です。なぜ彼らが従い難くなるように仕向けるのですか。壁の完成を誰よりも望んでいるのはマサロ人なのです。(顔を見合わせるコンパーレとハンガス)毎年、夏至の頃に吹く南からの風は、この街、特にアスカリナの南側に住むマサロ人を苦しめて来ました。一日に数尺も降り積もる砂に、家が埋もれてしまう事も珍しくはありません。だから彼らはアスカリナの南に砂を防ぐための壁を築く事を考えたのです。サラガヤがこの地に入る前の話ですが、マサロヤソマテに生まれた者なら誰でも知っている事です。サラガヤの統

治が始まってからはマサロ人が集会を持つ事は禁じられ、壁の話は立ち切れになっていました。ではなぜ今、彼らは壁を築く事を拒むのでしょうか。その用途はともかく、彼ら自身が望んでいた壁を築く事が出来るのに。理由は簡単です。確かに彼らは武力でサラガヤに統治されています。しかし、彼らの誇りは、心までは統治されてはいないという事です。あなた方の目に映る怠け者で無能なマサロ人は、心まで支配される事を拒んで、压制者の命令に従う恥よりは、鞭やこん棒で加えられる苦痛の方を選ぶ気高い民なのです。この事は、壁についてだけでなく、サラガヤが彼らに下すすべての命令において同じです。この先何年かかっても、祭司長が何人代っても、今のやり方を改めない限りはこのアスカリナであなた方の望むような結果は得られないでしょう。命令を下す前に、なぜ彼らの声に耳を傾けないのですか。

ハンガス

好きにさせろと言うのか、そんな事をして上手くいく筈はない。

タジム

壁の例で言うなら、彼らは、あなた方が思っているより更に高い、更に堅固な壁を築くでしょう。砂を防ぐために必要だからです。非人などと呼ばず、マサロ人に、人としての当たり前の生き方さえ許せば、彼らはサラガヤにとって信頼できる友人になるのです。マサロ人はそういう民なのです。

コンパーレ

今のやり方を、変える事は出来ないと言ったらどうする。

タジム

他に方法はないのですから私には何も出来ません。役に立たない者として、今この場で私の首をはねてください。それによって、サラガヤがこの地に来た事は永久に無駄になるでしょう。私の他に、この不幸な時代を終わらせる者は二度と出ないからです。なぜなら私こそが、彼らマサロ人に語るために命を頂いた者だからです。

照明変わり上下から一人二人と集まってくるマサロ人達、群衆の中に飲み込まれるコンパーレ達。手前の照明F O、クロスして中央奥の一段高い所に立つタジムにF I

タジム

マサロの兄弟達よ、もう一度顔を上げ、目をしっかりと見開きなさい。アスカリナの街が、再びあなた方の元に還って来たのです。通りの中央を歩きなさい。行き交う隣人に微笑みながら、笑いたければ声を立てて笑いなさい。自分達の言葉で歌い、自分達の祭りを祝う時が来たのです。

タジムの照明F O、クロスして手前のマサロ人達の照明F I

マサロ人

私はこの目で見て、この耳で聞いた。ありやあ絶対に間違いない。ラクサーダの生まれ変わりなんだよ。

マサロ人

私も見たよ、そして聞いた。ラクサーダが言った東の山よりいずる

聖者こそ、あの方なんだよ。

マサロ人

だって、サラガヤの坊さんなんだろ。

マサロ人

サラガヤとかマサロとか関係ないんだ。あの方の言葉は、すべての人を包み込む優しい言葉なんだ。東の山から、ソマテから、ラクサーダが帰って来たんだよ。

手前の照明F O、クロスして中央奥のタジムにスポット。

タジム

マサロの兄弟達よ、サラガヤにもソマテにも、すべての隣人達に寛大で正直でありなさい。そうすれば人生を終える時に、誇らしく笑って旅立つことが出来るでしょう。勝ち負けに執着してはならない。他人を出し抜き齒軋りさせた思い出よりも、手をさしのべ、喜ばせた思い出のほうが、あなた方を安らかな眠りに運ぶからです。さあ、あなた方の先祖がそうしたように、自分達の言葉で歌い、自分達の祭りを祝いなさい。

マサロ人

祭りだ、祭りだ、俺たちの祭りだ。

上下より祭りの衣装を着た若い娘達が登場し、歌い、踊り始める。

第十三幕

祭りの日、アスカリナの邦司公邸。遠くに祭りの音楽と、喧騒が聞こえる。

コンパーレ

(祭りの喧騒を聞いている)マサロの祭りが、このように華やいだものとは意外じゃった。

ハンガス

気ぜわしいばかりで、風情がございません。

コンパーレ

(笑)無骨者のハンガスが、風情とはな、

ハンガス

コンパーレ様、私にはやはり承服できませぬ。本当にこのままでよろしいのですか。

コンパーレ

何が承服出来ぬと申すのじゃ。城壁の構築も終わった。サラガヤの寺は賑わい、敷物や工芸、あらゆる雑貨類の生産がワシの赴任以来の出来じゃ。今年サラガヤ本国に送る荷はこの上なく大きな物となりそうじゃ。

ハンガス

しかしコンパーレ様、あのタジムは、

メディナ

(下手より登場。オルガも続いて登場)お父様、ただいま戻りました。

オルガ

ただいま戻りました。

コンパール

メディナ、オルガ、どうじゃった、マサロの祭りは。

メディナ

面白ろうございました。ねっ、オルガ。

オルガ

はい、楽しゅうございました。

コンパール

田舎の祭りじゃ、珍しい物もなかったであろう。人も少ないしろう。

オルガ

さすがに、人出の数では、サラガヤのそれには及びませんが、

メディナ

でも皆、祭りを心から楽しんでるのです。

オルガ

さようです。親子連れの睦まじさが微笑ましゅうございました。

コンパール

そうか、そうか、

メディナ

お父様、こちらでは若い者だけでなく、歳をとった夫婦も手を取り合

って踊るのでございますよ。

コンパレー

ほう、そうか。

メディナ

女達はみな足に鈴をつけて、歌にあわせて鈴を踏み鳴らすのです。ほ  
ら、このように。(コンパレーの手を取り、歌いながら踊る)

コンパレー

(笑)これこれ、父は目が回ってしまふぞ。

オルガ

お嬢様、

メディナ

(踊りながら)お父様、メディナはお昼が終わりましたら、聖堂に行き、  
タジム様にお会いしとうございます。よろしゅうございますか。

コンパレー

分かった、分かった、分かったから止めてくれ。

メディナ

良かった。オルガ、早くお昼に致しましょう。

オルガ

お嬢様、

メディナ

お父様、ささ、早く。

コンパーレ

(メデイナに手を引かれ笑いながら上手に)これこれ、メデイナ。ハンガス、話はまた後でな。

(コンパーレ達、上手に退場。一人残ったハンガス、いまいましそうな面持ちで立っている。しばらくしてモキ、下手より登場)

モキ

タジム様より、コンパーレ様への書状をお持ち致しました。

ハンガス

(しばしモキを見据えた)盗人の書いた書状などいらん。持ち帰れ。

ハンガス

(ハンガスの顔をじつと見るモキ。黙って上手に向かおうとする)帰れと言っているのが聞こえぬか。

モキ

(足を止め)恐れながら、タジム様はコンパーレ様よりこの地のまつりごとを託されておいでです。この書状は、月例のご報告。たとえ千騎長のハンガス様といえども、邪魔立ては無用でございます。

ハンガス

貴様、かりにもサラガヤの生まれであろう。なぜタジムのような非人に使われて黙っておる。腹がたたんだのか。ラビナスにしても貴様にしても、口先だけで生きる僧侶などという輩は、およそ恥というものを知らん。

モキ

失礼いたします。(構わずに立ち去ろうとする)

ハンガス

待て、その腐った性根、叩きなおしてくれる……よいか、あのタジムはソマテの小悪党だ。薄汚い盗人だ。(剣に手をかける)……では、お前に問う。タジムとは何者だ。

モキ

……この地に平和をもたらす方です。

ハンガス

……よくぞ申した。(剣を振り上げる)

兵・パド

(下手より登場)ご注進く、ご注進く、

ハンガス

何事だ、

兵・パド

サラガヤ本国に、東の蛮族が攻め入りましてございます。

ハンガス

何、

兵・パド

国王も敵の手に落ち、サラガヤ軍は壊滅の有様にてございます。

ハンガス

そんな馬鹿な、

兵・パド　更に、敵の一隊はこのアスカリナの近くにも迫っております。

ハンガス　くそつ、そ奴らいずこの者、敵将の名は、

兵・パド　攻め入りたる敵はモンゴル、敵将の名は（背後から刺される）ウオツ、

チンギスハーンにございます。

兵・パド、叫んだまま倒れる。壁の上にモンゴル兵が立ち並ぶ。動こうとしたハンガスの首元に、下手からモンゴル兵の剣。

（暗転）

#### 第十四幕

モンゴルの将チャガタイを中心に扇形に並ぶモンゴル兵達。やがて裁きの場に引き出されるタジム。

モンゴル兵

これより流されるすべての血は、サラガヤ国王の罪に起因する。我らがサラガヤに遣わしたる使者三十人を愚弄し、首をはねたる報いだ。モンゴル兵一人の命は、サラガヤ千人の命で贖われる。よってサラガヤ本国にては、国王以下三万人の兵士を処刑した。

タジム

それでは、すでにサラガヤへの制裁はお済みではありませんか。

チャガタイ

サラガヤの属国においても、モンゴルへの遺恨なきよう処置をとる。すべての行政の長、及び兵士の命は、これをとどめおく事なし。

タジム

このアスカリナは既に一年前、サラガヤの統治より自治を回復いたしております。従ってサラガヤ国王に起因するいかなる処罰もこれを受ける謂れはございません。

チャガタイ

この地は、サラガヤの属国ではないと申すか。

タジム

はい。

チャガタイ

ならば、その根拠を申してみよ。

タジム

サラガヤの属国にては、祭り、典礼はサラガヤのもの以外は行われません。しかし、ご覧になったように過日の祭りはマサロの祭りでございます。それは、この地がマサロ人の国、この街アスカリナが、マサロの街である事の証です。

チャガタイ

ならばマサロの国王はどこにおる。この地の長は何者ぞ。

タジム

マサロは、民の総意でまつりごとを行う国。従って行政の長はおおりません。

チャガタイ

それでは話にならん。祭司長としてのお前の証言はこれにて終了する。次の者の証言に移る。

タジム

お待ちください。この地が属国でなく、しかも国の長がおりましたら、その扱いはどのようになりますか。

チャガタイ

たとえ属国でなくとも、サラガヤと関わりのあつた国には相違あるまい。わが軍が攻め入りたる以上、この地においても何らかの成果は残さねばならん。国王がおれば、そのものを総代として処刑いたすが、お前が言うように国の長が不在であれば、成人男子五百の首をもつてこれに代える。本来はより詳しく調べての処置が望まれるが、我々も遠征の途中であるため先を急がねばならん。

タジム

ならば、これ以上の審議にお時間を割かれる必要はございません。私をこの地の長として処刑なさいませ。

チャガタイ

何、お前の首を差し出すと申すか。

タジム

はい。

チャガタイに傍らの兵士が耳打ちをする。

チャガタイ　お前は、ソマテ人タジムだな。

タジム　はい、

チャガタイ　この地の者の多くが、お前を民の長と慕っておるとの事、あい分かつた。要求通り、お前の首以外は咎めなしと致す。刑の執行は明朝、この地の刑場にて行う。これにて審議を終わる。

(暗転)

### 第十五幕

上手のスポットにハンガスと十人足らずの囚われ人達、座っている。

SE　鉄扉の開く音

モンゴル兵　審議は終わった。お前達は帰って良い。

囚われていた者達、喜び、立ち上がり、下手に退場。立ち上がるうとしないハンガス。ハンガスに一瞥をくれるが、そのまま立ち去ろうとするモンゴル兵。

ハンガス 待て、（モンゴル兵、振り返る）なぜ殺さん、生き恥を晒すより殺せ。

モンゴル兵、何も言わずに下手に退場。ハンガス一人残される。

ハンガス ……。

モキ （下手より登場）まずは、殺されずに済んだ事をお喜びください。

ハンガス 貴様、タジムの…サラガヤの者はどうなった。

モキ コンパーレ様も、ラビナス様も、無事でいらつしやいます。

ハンガス 咎め、なしという事か。誰一人、

モキ …タジム様は、処刑されます。

ハンガス 何、なぜだ。

モキ 彼らを説き伏せ、犠牲をご自分だけにとどめられたのです。アスカリ  
ナの誰も、血を流す事がないようにと。

ハンガス：タジムが。

モキ

あなたが、蔑まれていた、卑しき生まれの盗人が、あなたの命も救われたのです。サラガヤとマサロの為に、タジム様は刑場に牽かれようとしていらつしやるのです。

ハンガス

あ奴が一人で：：（勢い良く立ち上がる）

モキ

どうなさるおつもりですか。

ハンガス

奴を助ける。

モキ

おやめください。モンゴル兵は、味方一人の命をサラガヤ人千人の首で贖わせたのですよ。首尾よくタジム様を助け出しても、代りに処刑されるのはアスカリナに住む者すべてです。タジム様がお望みだと思われませんか。ご自分以外、誰も血を流す事がないようにと刑場に向かわれるのです。

ハンガス

（しばらく逡巡した後）：：：だったら：：：せめて、あの小僧を、見せてやる。

モキ

小僧？

第十六幕

夜明け前の刑場。杭を立て、処刑の準備をするモンゴル兵。その様子を背景に、刑場に急ぐハンガス、モキ、シャツポの声が聞こえる。引き出され、杭に繋がれるタジム。

ハンガス(声) 走れ、もたもたするな、夜が明けたら、終わってしまうぞ。

モキ(声) (息を切らしながら)しかし、なぜ殺さずに隠しておいたのですか。

ハンガス(声) 小僧がタジムの名前を叫んだからだ。ラビナスが何と言おうと、タジムが盗人だという動かぬ証拠だ。

モキ(声) ではなぜ、その時に、

ハンガス(声) コンパーレ様が喜ばれる筈はあるまい。

モキ(声) えっ、

ハンガス(声) 呪いを代って受けるというタジムが、ただの盗人だと分かってもな。しかし、殺さずにおけば、いつか役に立つ事もあるかと思っただ。

モキ(声) そうか。急ぎましょう。何としても、タジム様に、

シャツポ(声) 二人とも遅いよ、喋ってないで、もっと早く走れよ。

ハンガス(声) 閉じ込められていたくせに、元気のいい小僧だ。

中央に杭に縛られたタジム。うなだれたマサロ人達。上手よりカナ登場。しばらくして、下手よりシャツポ、ハンガス、モキ登場。

カナ (信じられない)シャツポ、

シャツポ (カナに走り寄り)カナ、

抱き合って、タジムを見上げるカナとシャツポ。

シャツポ タジム、

カナ タジム、(タジム目を閉じている)

ハンガス (大声)タジム、

タジム、ゆつくりと目を開け、シャツポとカナに気づく。少し驚き、嬉しそうな顔。

ハンガス

小僧は、生きているぞ、

モキ

：タジム様、

タジム

（優しい目でモキ達を見、やがてその視線を地平線に）少しだけ永らえた命で、随分違う生き方をさせて頂きました。結局ここに帰って来ましたが、あの時、あなたと一緒に刑場の露と散る筈だった男が、僅かな時間、見せて頂いた一場の夢が、今終わります。ラクサーダ：今度は、笑ってそちらに行けます。

— 幕 —

本作品の一部または全部を、無断複製、引用、改定することは、いかなる形であれこれを禁じます。また著者に無断での公演もできません。